

# 『日本書紀』編纂史料としての 百濟三書

Baekje Three Manuals as “Chronicles of Japan”  
Compilation Historical Materials

仁藤敦史

NITO Atsushi

はじめに

①研究史の整理と課題

②百濟三書の基礎的検討

おわりに

## 【論文要旨】

本稿では、百濟三書に関係した研究史整理と基礎的考察をおこなった。論点は多岐に渉るが、当該史料が有した古い要素と新しい要素の併存については、『日本書紀』編纂史料として8世紀初頭段階に「百濟本位の書き方」をした原史料を用いて、「日本に対する迎合的態度」により編纂した百濟系氏族の立場とのせめぎ合いとして解釈した。『日本書紀』編者は「百濟記」を用いて、干支年代の移動による改変をおこない起源伝承を構想したが、「貴国」（百濟記）・「(大)倭」（百濟新撰）・「日本」（百濟本記）という国号表記の不統一に典型的であらわれているように、基本的に分注として引用された原文への潤色は少なかったと考えられる。その性格は、三書ともに基本的に王代と干支が記載された特殊史で、断絶した王系ごとに百濟遺民の出自や奉仕の根源を語るもので、「百濟記」は、「百濟本記」が描く6世紀の聖明王代の理想を、過去の肖古王代に投影し、「北敵」たる高句麗を意識しつつ、日本に対して百濟が主張する歴史的根拠を意識して撰述されたものであった。亡命百濟王氏の祖王の時代を記述した「百濟本記」がまず成立し、百濟と倭国の通交および、「任那」支配の歴史的正当性を描く目的から「百濟記」が、さらに「百濟新撰」は、系譜的に問題のあった⑦毗有王～⑪武寧王の時代を語ることにより、傍系王族の後裔を称する多くの百濟貴族たちの共通認識をまとめたものと位置付けられる。三書は順次編纂されたが、共通の目的により組織的に編纂されたのであり、表記上の相違も『日本書紀』との対応関係に立って、記載年代の外交関係を意識した用語により記載された。とりわけ「貴国」は、冊封関係でも、まったく対等な関係でもない「第三の傾斜的關係」として百濟と倭国の関係を位置づける用語として用いられている。

なお前稿では、「任那日本府」について、反百濟的活動をしていた諸集団を一括した呼称であることを指摘し、『日本書紀』編者の意識とは異なる百濟系史料の自己主張が含まれていることを論じたが、おそらく「百濟本位の書き方」をした「百濟本記」の原史料に由来する主張が「日本府」の認識に反映したものと考えられる。

【キーワード】『日本書紀』、百濟三書、貴国、日本、傾斜的關係

## はじめに

『日本書紀』には百済との対外交渉を示す記事が、神功紀・雄略紀・継体紀・欽明紀を中心として多く存在する。この記載の主要な編纂史料とされたのがいわゆる「百済三書」である。百済三書とは、『日本書紀』にのみ引用された、百済の歴史を記録した歴史書で、『百済記』・『百済新撰』・『百済本記』の総称である。『日本書紀』において三書が書名を示し、註で具体的に引用されている個所は、神功四十七年条から欽明十七年条に至る合計26箇所<sup>(1)</sup>に及ぶ。その内訳は、『百済記』が神功・応神・雄略紀に5条、『百済新撰』が雄略・武烈紀に3条、『百済本記』が継体・欽明紀に18条であるが、それ以外にも用字法が共通することから、註引用よりも先行して対外関係を記した欽明紀以前の本文の作成にも多く利用されたことが想定されている。利用の仕方については引用分注によりはじめて本文の意味が具体的に分かる要約型、百済系文献をそのまま引用していないが、内容や用語により、百済系文献に依拠したことが容易に推測できる原文型、日本側所伝と組み合わせられた複合型の3類型<sup>(1)</sup>が指摘されている。なお、三書が本来通時代的な歴史書であるか、部分的なものであったかは、判断しにくい<sup>(2)</sup>が、引用する時期が限定的であることから、後者と考える説が有力である。

逸文には、「天皇」や「日本」など、明らかに7世紀後半以降に使用が開始された用語が含まれており、『日本書紀』編者の潤色改変を想定できる箇所があり新しい要素が存在すること、これに対して三書の用字がそれぞれ統一されず、古い推古期の用字を用いていることから、原史料の古さが想定されており、相反する2つの要素をどのように整合的に考えるかについて論争が継続している。

筆者は先に『日本書紀』にみられる「任那」観について、時期により異なる「官家」「日本府」「調」の用語を中心<sup>(2)</sup>に検討した。そこでは、『日本書紀』全体の「任那」観を分析したが、とりわけ「任那日本府」について反百済的活動をしていた諸集団を一括した呼称であることを指摘し、『日本書紀』編者の意識とは異なる百済系史料の自己主張が含まれていることを論じた。おそらく継体・欽明紀の本文においては、百済三書のうち「百済本記」を基礎史料としていることが想定されることから、こうした百済系史料の主張が「日本府」の認識に反映されていると想定される。

そこで本稿では、より厳密に百済三書の性格を検討することにより、その史料的内容を明らかにしたい。具体的には、研究史を整理したうえで、順番を含めて三書が編纂された時代、編纂主体や目的、『書紀』編者による改変や潤色の程度、などについて検討を行いたい。

## ①……………研究史の整理と課題

### 【津田左右吉説の検討】

百済三書の性格をめぐる論争においては、三書が編纂された時代、編纂主体や目的、『書紀』編者による改変や潤色の程度、などについて検討されてきたが、大きくは『日本書紀』との関係で、2つの立場が存在する。第一には、古い用字法を重視して、成書の成立を古く推古朝以前において、百済または倭国において編纂されたとする説である。第二には、「日本」「天皇」などの新しい要素

を重視して、『日本書紀』による改変や潤色あるいは、百済系遺民による編纂献上を想定する説である。

百済三書についての逐条的な解釈は大正期の津田左右吉氏にはじまる<sup>(3)</sup>。「書紀の材料としての百済史籍」の項では、『日本書紀』に百済の史籍から採った記事があることを、我が国に一般的な「新羅」ではなく「斯羅」などの用字法や、人名・地名などの表記、「結好」「東道」などの「百済本位の書き方」から推測する<sup>(4)</sup>。そのうえで、三書とも百済の上代から後世までの事績がまとまって編纂せられていた史籍との想定を前提に、『日本書紀』に採られた百済の記録は、応神紀ころには「百済記」であり、雄略紀ころには「百済新撰」、欽明紀ころには「百済本記」であり、時代によって引用書が定まっていたとすれば、日本の修史家の手もとには断片的にしか遺存していなかったと推測する。とりわけ「百済新撰」が最後にできたが、その成立は百済滅亡以前とする。百済の史籍が、三書以外にも存在した可能性についても雄略五年条の「百済新撰」とは異なる用字の「加須利」「軍君」の用字から推測する。

つぎに「百済の史籍に施された日本修史家の潤色」の項では、

日本の修史家が百済記の本文まで捏造したといふのは、やや妄断に近いやうではあるが、次々に述べる所を見ていくと、このくらの造作は至るところに行はれてゐることが知られよう。<sup>(5)</sup>

と述べて、原文に対しても大幅な潤色がなされたと論じる。さらに、

書紀の編者は百済の記録を取つてもかなり大胆な改変や潤色を加へてゐるので、其の主旨は、多くの場合に於いて、日本の権威と恩恵とを文字の上で示さうという点にあり、それに或る事実の起源を説かうといふ考から出たものが加はつてゐ、さうしてその潤色にはお伽噺的説話方式があるのである。<sup>(6)</sup>

と論じて、日本側の権威や恩恵を示し、起源を説くことに主眼があったとする。具体的には、「倭」を「大倭」、「狛」を「高麗」などと改めたように、「貴国」「天皇」「天朝」「日本」「任那日本府」などの用字、百済の領土が日本の領土であったかのような書きぶり、などを日本修史家の潤色と推測する。「貴国」「大倭」「日本」のように「しかし時には改訂すべくして改訂せられず、編者の注意を逸した文字が原文のまゝに残つてゐる場合がある」ことも認めるが、「幾人かの手で改訂が行はれたために統一が失われたのであろう」とする。

「任那、新羅、高句麗、及び呉、に関する書紀の記載」の項では、欽明23年の「任那官家」滅亡以後の記事は、日本の材料によったものとして見ることに異議はないとし、反対に外国に関する『日本書紀』の記載は、欽明紀の中頃以前においては、すべて日本人の手になった当時の記録から出たものではないと論じる。

「神功紀の記載の批判」の項では、神功紀の記載は、『古事記』（旧辞）になく『日本書紀』にのみ見えることから、継体・欽明期における百済の記録（肖古王が甲子の年に初めて日本に交渉を開いたという記事）を基礎にして作られた昔物語と推測する。

全体として、『日本書紀』が百済三書を欽明期以前の主要な外交記事の基礎史料として用いていたこと、一方で「日本」「天皇」などの用字の改変は新しいこと、など現在にまで継承すべき基本的論点が指摘されている。

しかしながら、「日本の修史家が百済記の本文まで捏造した」とするためには、「時には改訂すべ

くして改訂せられず、編者の注意を逸した文字が原文のまゝに残つてゐる場合」が多くあることの理由が説明しにくいと思われ、基本的に註に引用された三書の原文は尊重されていると考えるべきである。また、三書が上代から後世までの事績がまとまって編纂せられていた百済の本格的な歴史書であるとの想定は、引用が時代ごとに三分されていることから従いにくく、百済滅亡以前との想定も根拠は示されていない。註に引用された原文が尊重されているとすれば、表面的には矛盾している「百済本位の書き方」と「日本に迎合した書き方」との併存を説明する必要がある。「日本」「天皇」などの用字を除き、すべてを『日本書紀』編者の大胆な改変や潤色でないとするならば、三書の最終的な成立は、亡命百済人による迎合的な記載が想定できる7世紀後半以降に遅れることになるのではないか。

さらに継承すべき論点としては、三書成立の前後関係である。「百済記」を基礎とした神功紀の記載は、日本と百済との交渉の起源を説明するものであるが、継体・欽明紀の基礎史料である「百済本記」には肖古王の時代に加耶との交渉を開始したことはたびたび記載されているが、倭国との関係は説明されていない。

『日本書紀』欽明二年四月条

聖明王曰、昔我先祖速古王・貴首王之世、安羅・加羅・卓淳旱岐等、初遣<sub>レ</sub>使、相通厚結<sub>二</sub>親好<sub>一</sub>、以為<sub>二</sub>子弟<sub>一</sub>、

『日本書紀』欽明二年七月条

昔我先祖速古王・貴首王、与<sub>二</sub>故旱岐等<sub>一</sub>、始約<sub>二</sub>和親<sub>一</sub>、式為<sub>二</sub>兄弟<sub>一</sub>。於是、我以<sub>レ</sub>汝為<sub>二</sub>子弟<sub>一</sub>、汝以<sub>レ</sub>我為<sub>二</sub>父兄<sub>一</sub>。

『日本書紀』欽明五年十一月条

聖明王謂之曰、任那之國、与<sub>二</sub>吾百済<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>古以來、約<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>子弟<sub>一</sub>。

加耶諸国を「子弟」、百済を「父兄」と位置付ける傾斜的な「百済本位の書き方」に注目するならば、欽明紀のこれらの記載は「百済本記」を基礎史料とするものであり、百済と加耶諸国との交渉開始記事が伝えられていたと考えられる。神功紀の記載は、百済と卓淳国との交通が前提にあり、卓淳国を仲立ちにして百済と倭国の交渉が開始されたという構成になっている。「百済本記」における肖古王の時代に加耶との交渉を開始したとの伝承を基礎として、「百済記」には甲子（364）年7月に百済が卓淳国に使者を派遣したことから、百済に倭人が卓淳人とともにやって来たとの素朴な記載があり、そして神功紀のような記載に発展したと考えるのが自然である。以上の想定によるならば、「百済本記」、「百済記」、「百済新撰」の順で編纂された可能性が高いと考えられる。

## 【今西竜説の検討】

百済三書の史料研究は、先駆的には今西竜氏が成立について論じている<sup>(7)</sup>。

肖古王の時代から百済には記録が出来た。後に此らの代々の記録を資料にして編纂されたと思はるる百済の歴史の書には百済記・百済新撰などがある。此等の書は日本朝廷に差し出す為めに百済人が書いたもので百済本記は推古天皇二十八年に出来た本記の類であろう。日本書紀編纂の時には此等の書を史料とされたので、日本書紀の百済の記事が詳細にして正しいのである。ここには、後の議論に関係する重要な指摘がすでになされていることが注目される。



まず、肖古王の時代から記録が出来たという指摘は、

『三国史記』百済本紀 近肖古王

古記云、百済開国已来、未<sub>レ</sub>有<sub>下</sub>以<sub>二</sub>文字<sub>一</sub>記<sub>上</sub>レ事、至<sub>レ</sub>是得<sub>二</sub>博士高興<sub>一</sub>、始有<sub>二</sub>書記<sub>一</sub>、然高興未<sub>二</sub>嘗顯<sub>二</sub>於他書<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其何許人<sub>一</sub>也

との記載によるもので、博士高興によりはじめて、文字による記録がなされたと記されるように、百済史が記録化された記事を根拠としている。少なくとも「百済記」は肖古王からの記事があり、『三国史記』以降みえる伝説的な百済王の記載は存在しない。「百済記」は肖古王の記載のみであり、第5代目の肖古王と区別した第13代近肖古王の表記はまだなされていない。「百済記」を参照していない『古事記』応神段にも「百済国主照古王」の記載がなされていることを重視するならば、第13代近肖古王と区別して、第5代目の肖古王が後に架上されたものと推定される。おそらく、「百済記」が近肖古王から記載を始めるのは、これ以前の伝承が体系化されていなかったことと、百済史の記録化がこの頃から開始されたことによると考えられる。

さらに、「本記」の語義について今西竜氏は、

『日本書紀』推古二十八年是歳条

皇太子嶋大臣共議之、録<sub>二</sub>天皇記及国記<sub>一</sub>、臣連伴造国造百八十部并公民等本記<sub>一</sub>。

とある「公民本記」の内容に類するものと想定している。「臣連伴造国造百八十部并公民等本記」は「国記」の説明であり、『新撰氏姓録』序に「皇極握<sub>レ</sub>鏡、国記皆燔、幼弱迷<sub>二</sub>其根源<sub>一</sub>、狡強倍<sub>二</sub>其偽<sub>一</sub>」とあり、「国記」が氏姓との関係で説かれているように、史書ではなく氏族別の出自やその奉仕の根源を記載しているとするならば、「百済本記」の意味は、単なる歴史書ではなく、断絶した王系ごとに百済遺民の出自や奉仕の根源を語るものであった可能性が指摘できる。後に編纂された『三国史記』百済本紀のような一系的な王統譜ではなく、百済史について、複数の歴史書が必要とされたのは、本来異なる王系により王位継承がなされていたことの名残と解釈される。

さらに、重要な論点は後述する坂本太郎、山尾幸久氏の議論に継承される「此等の書は日本朝廷に差し出すために百済人が書いたもの」との指摘がすでになされていることである。ただし、その時期については明言していない。

## 【池内宏説の検討】

つぎは池内宏氏の見解をとりあげる。<sup>(12)</sup>まず、神功紀の解釈について、津田説が継体・欽明期における百済の記録（肖古王が甲子の年に初めて日本に交渉を開いたという記事）を基礎にして作られた昔物語とするのに対して、甲子年・丁卯年・己巳年という干支の記載を尊重して、百済王と倭王の交渉、百済王が倭王に帰服、倭王が新羅討伐の軍を出したことの3条を「百済記」の記載と認定した。「書紀の神功皇后四十六年条には、百済来服の事情をといた記事があるが、これは書紀の朝鮮関係の記事のうち、朝鮮側の古記録百済記の利用せられている点において、だいたい歴史的事実を伝えたものと認めることのできる上限である」として、壬申紀の骨子を認める立場を採用する。<sup>(13)</sup>

干支により史実性を判断する方法は「史記や遺事に某王の何年とあっても、実際そうであったかどうかはなほだ覚束ないのであって、到底信用を置くことはできないのである」とも論じられているように、確実ではない。先述したように、「百済本記」には百済と倭国との具体的交渉や「任那」

支配の起源が語られていないことを重視するならば、肖古王が甲子の年に初めて日本に交渉を開いたという記事と七枝刀の渡来伝承程度しか本来は存在せず、「百済記」が倭国との交渉開始や七国平定などの新たな伝承をその間に数年単位の干支を付して案配したとも考えられる<sup>(15)</sup>。おそらくは、「百済記」を引用しない『古事記』応神段に「百済国主照古王，以<sub>二</sub>牡馬壺疋・牝馬壺疋<sub>一</sub>，付<sub>二</sub>阿知吉師<sub>一</sub>以貢上。(中略)。亦貢<sub>二</sub>上横刀及大鏡<sub>一</sub>」とあるように、照古（肖古）王代に横刀と大鏡が貢上されたとあるのが、原初的な伝承であったと推測される。「百済記」が「百済本記」を前提として、百済と倭国との通行開始と「任那」支配の起源を説く目的で編纂されたとするならば、干支記載の有無で史実を単純には判断することはできないと考える。

また用字や文章については、「書紀にひかれている百済記の文には、わが国に対して「貴国」という文字の用いられているのを常とする。これは本来「倭」とか「倭国」とかあったのを、書紀の編者がその文を転載するときにこう書き改めたものであろう<sup>(16)</sup>」として書紀編者による潤色を想定し、「「百済記」という百済の古記録を利用して記事の本文をつくり、あるいはその分註に若干の変更をくわえた原文を引用している<sup>(17)</sup>」と述べて基本的に津田説と同じ立場をとる。

## 【坂本太郎・木下礼仁説の検討】

つぎは同じく1961年に発表された坂本太郎氏と木下礼仁氏の論考を取りあげる<sup>(18)</sup>。まず坂本太郎氏は、

私はまずこれらの書物は百済で書かれたなまの記録ではないと考える。核心には百済で書かれた記録があるであろうが、こういう書物の形にしたのは、かなり後で、具体的には百済滅亡後日本に亡命した百済人が、その持参した記録を適当に編集して、日本政府に提出したものであろうと思う。それは、これらの書には、古い時代には使用されなかったと思われる用語や、日本を不自然に尊敬したような筆致が見えるからである。

と論じて、百済滅亡後に亡命百済人により編集・提出されたものとの見解を示している。その時期を判定する理由としては、

たとえば、天皇・天朝というような用語が頻出する。日本で天皇という称号が定まったのは推古朝をさかのぼることはないから、百済の現記録にそうあったとは思われない。後に修正したものでなければならぬ。また百済本記では日本の国号を原則としている。日本の国号が定まったのは大化改新の時であろうから、これもそれ以後の編述ということになる。とくに百済記では日本のことを貴国と称する。こびへつらったいやな称であり、百済の原記録にあったとはとうてい思われない。すべて後の編者が手を加えて、日本政府の意を迎えようとした心づかいである。

と論じて、津田氏が『日本書紀』の潤色と考えていた「天皇」「天朝」「日本」「貴国」などの用語を、百済三書の原文に存在したと考え、百済の現記録を亡命百済人が手を加え、日本政府の意を迎えようとした心づかいであると推測した<sup>(19)</sup>。

原文の尊重と古い用字法のバランスを考えた編纂時期の想定は絶妙であると評価される。ただし、「天皇」「天朝」「日本」「貴国」のような百済三書における「こびへつらったいやな称」が必ずしも全体で統一されていないことは、本来の百済の原記録になかったとする想定に従うには躊躇される。

一方、木下礼仁氏は、百済三書に用いられている字音仮名の用例を国語学的に詳細に分析された。その結論によれば、百済三書にみえる単音の字音仮名は合計 58 字に及ぶが、そのうち 27 字は『日本書紀』本文には用いられていない独特の用例であり、そのうち 7 字は推古遺文との間に密接な関連を有するとされた。この三書の撰述は「推古遺文」を残した人達と同じ流れの中にあった文化荷担者の手になるものであり、その撰述時期も 7 世紀末あるいは 8 世紀初頭まで降って位置づけることは出来ない<sup>(20)</sup>と論じる。

三書一括の分析である点については批判もあるが<sup>(21)</sup>、百済三書の成立時期をめぐる論争において、百済三書の古さを用字法から詳細に分析したことにより、成書の成立を古く推古朝以前において、百済または倭国において編纂されたとする説の大きな根拠となっている。成書の成立を遅く見る第二の立場からは、唐の漢字音が学ばれる以前においては百済からの影響が大きいことは明らかであり、百済人により記された百済系史書との用字が一致するのは当然であるとの批判もある<sup>(22)</sup>。

### 【三品彰英・井上秀雄説の検討】

さらに三品彰英氏は、三書献上説に立ちながらも、三書の成立時期や編纂理由などについて詳細な検討を加えている<sup>(23)</sup>。「貴国」などの用字については、すべて三書の原字と考え、三書は木下氏の検討された借字法と「百済本記」が威徳王代に内容が及んでいないことから推定して、威徳王薨去の 598（推古 6）年までに撰述され、日本へ呈上されたと推測する。百済系史料の利用の仕方については先述した要約型、原文型、複合型の 3 類型を指摘し、欽明紀には「百済本記」を用いた原文型が多く、継体紀には日本側史料を組み合わせた複合型が多いことから、用いられ方は『日本書紀』編者の方針により異なっていることを指摘する。

三書は、王の薨去即位（ただし、「百済記」以外に百済王暦書があったことには否定的）の外すべて両国に関係した諸問題に限られていることから、百済史一般を記述したものではなく、百済と日本との関係を主題とした特殊史的なものであったとする。「百済記」の王暦は現行の『三国史記』と同系統、「百済新撰」とは別系統で、「百済記」よりも「百済本記」が新しく、「百済記」の続編として撰述されたとする。

「百済記」については、神功紀と応神紀の対朝鮮関係記事のうち、史料的に信憑度の高い部分はほとんど本書に依拠したと推定されるので、その内容は加羅諸国及び南韓地域に対する百済の特殊権益を主張したものであることから、6 世紀の聖明王代の理想を、過去の肖古王代に投影したもので、貴国すなわち日本に対して百済が主張する歴史的根拠として欽明期から推古期にかけての日本を意識して撰述されたとする。

「百済本記」については、「百済記」と同様に、継体・欽明紀本文、とりわけ後者の「任那」関係記載のほとんどは本書に依拠したものであり、「任那」に対する百済の立場を主張していることに注目する。さらに、三書を考察するうえで重要なのは、数多い百済王の後裔と称する百済系諸蕃のうち、最も多くの、かつ有力諸氏が族祖と伝説するのが肖古・貴首の二王であり、蓋鹵王から武寧王に至る五王は、史記・遺事・書紀三書の諸伝が相違しているとの指摘である<sup>(24)</sup>。

三品説は、百済史料の利用の仕方を 3 区分し、巻毎の利用態度の分析に道を開いた点、さらにそれまで一括して扱われていた三書を区別し、百済と日本との関係を主題とした特殊史的なものと

立場から、「百済記」編纂の背景を論じた点が大きく評価される。

しかしながら、少なくとも「日本」の用字の使用時期を古くにさかのぼらせることは無理があり、早くとも7世紀後半以降の記載としなければならず、<sup>(25)</sup>『日本書紀』による改変や潤色あるいは、百済系遺民による編纂献上を想定する以外に合理的説明はできないと思われる。また、6世紀の聖明王代の理想を、過去の肖古王代に投影したものとの正しい理解を示されながら、同時代史である「百済本記」よりも、理想像の「百済記」の成立が古いとされる点は納得しにくい点である。「倭」が三人称的であるのに対して、「貴国」を二人称的呼称とされる点も、後世の一般的意味により解釈しており、必ずしも同時代的文脈としてどのように使用されてたかは検討されていない。

百済三書の編纂理由として、百済と日本との関係を主題とした特殊史的で、百済側の加耶に対する特殊権益の主張が強いとするならば、王系の断絶が疑われる蓋鹵王から武寧王に至る五王の時期を対象に「百済新撰」が編纂されたことや、「百済記」が対象とした時期が、数多い百済王の後裔を称する百済系諸蕃にとって肖古王と貴首王が始祖的王存在であったこと、さらには「百済本記」が対象とする武寧王以降が、日本に亡命した百済王の直接の祖とされていること、などは重要な意味を持つと考えられる。

なお、三品説では、笠井倭人氏の議論を発展させ、2つの百済王暦の存在を示し、「百済本記」が記す継体没後の空位を解消する議論も提起されている。<sup>(26)</sup>『三国遺事』の王暦を尊重し、威徳王即位までの空位を3代前の東城王在位を延長することにより解消した空位を認めない異なる王暦が存在したと説明する。しかしながら、すでにいくつか批判があるように、2つの百済王暦は存在しないと考えられる。<sup>(27)</sup>そもそも『三国遺事』巻一の王暦を誤りがなく、即位干支と治世年数が別系統という大前提により議論が開始されるが、後に編纂された『三国遺事』の王暦に誤りがなく、『三国史記』を参照せずに、即位干支と治世年数が未調整のまま残されていることは想定し難い。根本的には1代の王における治世の調整ではなく、複数の王代に跨る改変を行う必然性にも乏しい。百済王の空位解消により、倭王の空位解消を説明する論理は、空位は解消されなければならないとの大前提に立った相互依存の循環論法であり必ずしも説得的ではない。

三品説をさらに発展させたのが井上秀雄氏の議論である。<sup>(28)</sup>まず『日本書紀』と注引されている百済三書の原文との関係について逐条的に検討し、三品説が提起した要約型・原文型・複合型の3類型を承認したうえで、「任那」領有についての百済側の主張を語った歴史書である点と『日本書紀』編者の原文を尊重する態度について確認された。そのうえで、用字が推古期の銘文と類似している点、「百済本記」が欽明18年の威徳王の即位で終わっている点などから、「百済記」は、大和朝廷の軍事援助を得ようとして、欽明15年に編纂将来したもので、「百済本記」は推古5年に百済の王子阿佐が来朝した時（あるいは推古10年の百済僧観勒渡来時）にもたらされたものと推測する。

「百済本記」が時期を異にする3種の原史料（継体紀・欽明紀五年条までの前半・欽明紀六年条以降の後半の記述に対応）からなる複雑な編纂物で、『日本書紀』編者が、その原文をできるだけ統一せずに尊重していることは重要な指摘である。しかしながら、2つの百済王暦説を前提に継体空位の記載が『日本書紀』が一旦編纂された後に導入されたとして、「百済本記」の採用のみが遅れたとの指摘は、不自然であり従いにくい。威徳王代以降にまとめられた百済側の立場を主張する3種の原史料が独立的で、古い用字であったことと、後にそれらの用字を尊重しながら、百済亡命



人により「百済本記」として日本に迎合的な記述にまとめられたことは必ずしも矛盾しないと考えられる。<sup>(29)</sup>

## 【近年の諸説の検討】

丁仲煥氏の見解は、津田・今西・坂本説を継承させたもので、百済で編纂された史書が亡命百済人により『日本書紀』編集のための材料として改修されたとの見解である。<sup>(30)</sup>干支や月日を記載した編年の記事であるが、中国史書に伝わる百済遺文の本格漢文に比較すると、「也」「之」などの用例に日本的な特色があるとの指摘は重要である。<sup>(31)</sup>推古朝の遺文の借音字が百済式の借音字により近いのは当然であり、百済三書の借音字が推古期の遺文と大きな一致をみることだけで、百済三書が推古朝前後に作成されたとみることとはできないとの指摘も注目される。「貴国」の解釈を第二人称的なものと見る三品説に対しては、尊称、美称として第三人称的に使われる言葉であることは『日本書紀』に用例が多くあり、間違いないので、無理のある解釈だとする。貴国・大倭・日本の称号は美称であり三書の作成年代を決定できないが、天皇・天朝の用語は編纂時期を考える定点となるとする。さらに、三書には百済を一人称ではなく三人称的な記述がみられることを指摘する。単一の史書でないことも問題であり、こうしたことから、百済本国で公式に編纂された史書ではあり得ないと評価する。欽明紀以降は日本側記録に依拠しているので、「百済本記」の引用は、いったん欽明紀で終わると考えられ、聖王ないし威徳王までの百済史書であったと推測する。

百済の正統な本格漢文と百済三書の用字が異なるとの指摘は重要で、百済本国で公式に編纂された史書ではあり得ないだけでなく、年代も推古期に限定されないとすれば、原史料を日本で編集した可能性も高いと考えられる。

ただし、公的でない史書という位置づけは不明確であり、内容が日本との関係や「任那」支配に重点があるとすれば、異なる王系ごとに編纂された単なる歴史書ではなく、断絶した王系ごとに百済遺民の出自や奉仕の根源を語るものであったとするのが自然である。また、貴国・大倭・日本の称号が、美称と言い切れるかは疑問である。

一方、久保田喜一氏は、推古朝の用字と大化以後の「日本」号が使われていることの矛盾を、2度の編纂作業を想定することにより解消しようとした。<sup>(32)</sup>まず原「百済本記」の編纂が百済人により推古期に編纂され、百済滅亡後に亡命百済人により再編集されたと考えるものである。

2時期の編纂という想定において障害となるのは、『日本書紀』編集時においてさえ用字の統一が部分的にしかなされていない原文尊重主義と、井上氏が指摘した「百済本記」が原史料を異にする複雑な編纂物であったことである。原「百済本記」よりも3種の原史料に古い用字を想定した方が無理がなく、ひとたびの編纂として原「百済本記」を想定することにはあまり意味がないと思われる。さらに再編集時の用字改変が部分的であったことも説明がしにくい。「百済本記」の同時代史料としての価値の高さに対して、外国関係記事における極端な潤色の想定も不自然である。

山尾幸久氏の説は、亡命百済人による迎合的な記載として位置付ける立場から百済三書に対して詳細な検討を加えている。<sup>(33)</sup>結論としては、百済で撰述された原記録を基礎として、7世紀末に亡命百済人により大幅に書き改められて、『日本書紀』の資料として提出されたとする。『百済本記』は、百済王の天皇への奉仕の由来を示す史書として書かれたものであり、690年前後に纂進され、『日

本書紀』の編纂と関係して、他の二書はやや遅れて成立したとする。時期特定の根拠は、朱鳥元(686)年の百済王氏による天武天皇への奉誄、持統5(691)年の百済王氏への優賞に注目し、この時点で『日本天皇』に臣従する「百済王」の歴史が求められたとみる。とりわけ「百済記」にみえる「貴国」を外交文書にみえる二人称的な呼称とする三品説を批判し、「可畏天皇」に通じる「蕃国」と対になる呼称であり、百済王氏を諸蕃に位置付ける7世紀後半の歴史的自己認識の反映と解釈した。

近年の加藤謙吉氏も基本的に山尾説を継承する。<sup>(34)</sup>その成立時期についてはやや遅らせて、「百済本記」は7世紀の最終段階、残る二書は8世紀初頭に完成したと推測する。三書は共通の目的で組織的に編纂されたのであり、表記上の相違も『日本書紀』との対応関係に立って、時代に適応した叙述法が求められた結果と判断されるとした。

山尾説は基本的に首肯できる説であるが、「蕃国」に対応させた「貴国」の解釈および三書の成立年代についてはやや異論があるので、その点については後述したい。

これに対して、笠井倭人氏と角林文雄氏は、百済において6世紀代に編纂された本格的な百済史の書として百済三書を位置づけ、『日本書紀』にみられる記述は二次的な修飾、部分的な用語の改変にすぎないと結論づける。<sup>(35)</sup>まず笠井倭人氏は、三書の編集が百済王脈の断絶ないしは傍流の継承と深くつながること、高句麗の王位継承伝承を記載していること、などから本格的な百済史として百済側で編纂されたものとした。角林文雄氏も国号などの用字だけが改変されたもので、三書はすでに6世紀代に百済で完成していたと述べる。古くは「倭」「天王」と記されていたが、『日本書紀』の巻毎の編纂方針(編纂者には亡命百済人を含む)により、「百済」や「貴国」「天朝」,「日本国」などの表記に改めたとする。

笠井氏が指摘された三書の編纂と王系の交代が密接な関係にあったことは重要な指摘であり首肯される。しかしながら、笠井・角林両氏が指摘する、百済側での史書としての編纂という結論については、三品説が説くように三書は、王の薨去即位の外、すべて両国に関係した諸問題(高句麗も百済・倭国に共通して「北敵」の脅威として認識される)に限られていることから、百済史一般を記述したものではなく、百済と日本との関係を主題とした特殊史的なものであったとする点、「百済本記」の記載年代が短い点、などから従いにくい。「亡命人が各氏族の系譜を記したようなものは提出されたであろう」と角林氏も認められるように、百済王の後裔と称する百済系諸蕃にとっての始祖王的存在を3系に分けて、百済と倭国の通交や「任那」支配を主題にして奉仕の由来を記述することに目的があったと考えられる。井上秀雄氏が論証された「百済本記」が時期を異にする3種の原史料からなる複雑な編纂物で、かつ『日本書紀』編者が、その原文をできるだけ統一せずに尊重していること、丁仲煥氏が指摘した百済の正統な本格漢文と百済三書の用字が異なること、などを尊重するならば、百済本国で公式に編纂された史書であり、『日本書紀』における巻毎の調整との結論には従いにくい。また貴国が外交文書には用いられるが、史書には用いられない二人称的表現であるとの議論や、国号の一括的な潤色という議論も、これまで論じてきた三書の実証的な研究を前提とすれば、もはや成立しにくいのではないかと。なお、加羅諸国を「蕃国官家」とするのは、明らかに倭国が加羅＝「任那」を支配していることを前提にした位置づけであり、百済主体の表現ではない。あくまで原書に「貴国」「大倭」「日本」にあったとすべきある。

なお、近年では遠藤慶太氏が「貴国」に「蕃国」の意味がないこと、中国正史にない太歳紀年の

採用などを根拠として、百濟系フミヒトを担い手とする推古期における三書の編纂を想定する<sup>(37)</sup>。

同時代的表記としての「貴国」の解釈については後に詳述するが、山尾幸久氏のように「貴国」を冊封を前提とする君臣関係でとらえることは正しくなく、「結好」を結ぶ相手国にも用いられる表現であり、「百濟記」の原文に「貴国」の表現があったことは首肯される。しかしながら、「貴国」表現や太歳表記だけでは亡命百濟人による編纂を否定する根拠としては弱いと考えられる。

以上、研究史を概観してきたが、現状では百濟側で正式な歴史書として6世紀代に三書が成立したことを想定する説および『日本書紀』編者による原文に対する大幅な潤色がなされたとの説は、成立が困難になりつつある。推古期あるいは白村江の敗戦以後の時期に渡来人により編纂されたとの見解に収斂しつつあると考えられる。推古期を重視するのは古い用字を尊重するもので、白村江の敗戦以後とするのは、「日本」「天皇」「貴国」などの用字を重視するためである。ただし、「貴国」の解釈については、冊封臣従関係を示す用語として位置付ける議論と、特別な意味を認めない対等的関係として位置付ける議論が対立しているため、以下で検討したい。

## ②……………百濟三書の基礎的検討

### 【百濟三書の引用箇所】

先述したように、『日本書紀』において三書が書名を示し、註で具体的に引用されている箇所は、神功四十七年条から欽明十七年条に至る合計26箇所<sup>1)</sup>に及ぶ。その内訳は、『百濟記』が神功・応神・雄略紀に5条、『百濟新撰』が雄略・武烈紀に3条、『百濟本記』が継体・欽明紀に18条が確認される。とりわけ、「百濟本記」が時期を異にする3種の原史料（継体紀・欽明紀五年条までの前半・欽明紀六年条以降の後半の記述に対応）からなる複雑な編纂物であったとの指摘もある。ここでは、研究史の検討を踏まえ、三書が編纂された時代、編集した主体や目的、『日本書紀』編者による潤色・改変の程度について、私見を述べたい。

#### 01『日本書紀』神功紀四十七年四月条

因以<sub>レ</sub>千熊長彦<sub>ヲ</sub>為<sub>ス</sub>使者<sub>ニ</sub>、当<sub>レ</sub>如<sub>ク</sub>所願<sub>ス</sub>。〈千熊長彦者、分明不<sub>レ</sub>知<sub>ス</sub>其姓<sub>ノ</sub>人。一云、武藏国人、今是額田部槻本首等之始祖也。百濟記云<sub>ニ</sub>職麻那那加比跪<sub>ノ</sub>者、蓋是歟也。〉

#### 02『日本書紀』神功紀六十二年条

新羅不<sub>レ</sub>朝。即年、遣<sub>ス</sub>襲津彦<sub>ヲ</sub>擊<sub>ス</sub>新羅<sub>ヲ</sub>。〈百濟記云、壬午年、新羅不<sub>レ</sub>奉<sub>ス</sub>貴国<sub>ヲ</sub>。貴国遣<sub>ス</sub>沙至比跪<sub>ヲ</sub>令<sub>レ</sub>討之。新羅人莊<sub>ニ</sub>飾美女二人<sub>ヲ</sub>迎<sub>テ</sub>誘<sub>フ</sub>於津<sub>ニ</sub>。沙至比跪受<sub>テ</sub>其美女<sub>ヲ</sub>、反伐<sub>ス</sub>加羅国<sub>ヲ</sub>。加羅国王已本早岐及兄百久氏・阿首至・国沙利・伊羅麻酒・爾汶至等将<sub>テ</sub>其人民<sub>ヲ</sub>来<sub>テ</sub>奔百濟<sub>ニ</sub>。百濟厚遇之。加羅国王妹既殿至向<sub>テ</sub>大倭<sub>ニ</sub>啓云、天皇遣<sub>ス</sub>沙至比跪<sub>ヲ</sub>、以討<sub>ス</sub>新羅<sub>ヲ</sub>。而納<sub>ス</sub>新羅美女<sub>ヲ</sub>、捨而不<sub>レ</sub>討。反滅<sub>ス</sub>我国<sub>ヲ</sub>、兄弟・人民皆為流沈。不<sub>レ</sub>任<sub>ス</sub>憂思<sub>ヲ</sub>。故以来啓。天皇大怒、既遣<sub>ス</sub>木羅斤資<sub>ヲ</sub>、領<sub>テ</sub>兵衆<sub>ヲ</sub>来<sub>テ</sub>集加羅<sub>ニ</sub>、復<sub>ス</sub>其社稷<sub>ヲ</sub>。一云、沙至比跪知<sub>テ</sub>天皇怒<sub>ヲ</sub>、不<sub>レ</sub>敢公還<sub>ス</sub>。乃自竄伏。其妹有<sub>レ</sub>幸<sub>ヲ</sub>於皇宮<sub>ニ</sub>者<sub>上</sub>。比跪密遣<sub>ス</sub>使人<sub>ヲ</sub>、問<sub>テ</sub>天皇怒解不<sub>レ</sub>。妹乃託<sub>テ</sub>夢言、今夜夢見<sub>テ</sub>沙至比跪<sub>ヲ</sub>。天皇大怒云、比跪何敢来。妹以<sub>テ</sub>皇言<sub>ヲ</sub>報之。比跪知<sub>テ</sub>不<sub>レ</sub>免、入<sub>テ</sub>石穴<sub>ニ</sub>而死也。〉

03『日本書紀』応神八年三月条

百濟人來朝。〈百濟記云，阿花王立无<sub>レ</sub>礼於貴国<sub>一</sub>。故奪<sub>二</sub>我枕弥多礼及峴南・支侵・谷那東韓之地<sub>一</sub>。是以遣<sub>二</sub>王子直支于天朝<sub>一</sub>，以修<sub>二</sub>先王之好<sub>一</sub>也。〉

04『日本書紀』応神二十五年条

百濟直支王薨。即子久爾辛立為<sub>レ</sub>王。王年幼，大倭木満致執<sub>二</sub>国政<sub>一</sub>。与<sub>二</sub>王母<sub>一</sub>相姪，多行<sub>二</sub>無礼<sub>一</sub>。天皇聞而召之。〈百濟記云，木満致者，是木羅斤資討<sub>二</sub>新羅<sub>一</sub>時，娶<sub>二</sub>其国婦<sub>一</sub>而所<sub>レ</sub>生也。以<sub>二</sub>其父功<sub>一</sub>，專<sub>二</sub>於任那<sub>一</sub>。來<sub>二</sub>入我国<sub>一</sub>，往<sub>二</sub>還貴国<sub>一</sub>。承<sub>二</sub>制天朝<sub>一</sub>，執<sub>二</sub>我国政<sub>一</sub>。權重當<sub>レ</sub>世。然天皇聞<sub>二</sub>其暴<sub>一</sub>召之。〉

05『日本書紀』雄略二年七月条

百濟池津媛遣<sub>二</sub>天皇將<sub>一</sub>幸，姪<sub>二</sub>於石河楯<sub>一</sub>。〈旧本云，石河股合首祖楯。〉天皇大怒，詔<sub>二</sub>大伴室屋大連<sub>一</sub>，使<sub>下</sub>來目部張<sub>二</sub>夫婦四支於木<sub>一</sub>置<sub>二</sub>仮座<sub>一</sub>上，以<sub>レ</sub>火燒死<sub>上</sub>。〈百濟新撰云，己巳年，蓋鹵王立。天皇遣<sub>二</sub>阿礼奴跪<sub>一</sub>，來索<sub>二</sub>女郎<sub>一</sub>。百濟莊<sub>二</sub>飾慕尼夫人女<sub>一</sub>，曰<sub>二</sub>適稽女郎<sub>一</sub>，貢<sub>二</sub>進於天皇<sub>一</sub>。〉

06『日本書紀』雄略五年七月条

軍君入<sub>レ</sub>京。既而有<sub>二</sub>五子<sub>一</sub>。〈百濟新撰云，辛丑年，蓋鹵王遣<sub>二</sub>王弟琨支君<sub>一</sub>，向<sub>二</sub>大倭<sub>一</sub>侍<sub>二</sub>天皇<sub>一</sub>，以修<sub>二</sub>先王之好<sub>一</sub>也。〉

07『日本書紀』雄略二十年冬条

高麗王大發<sub>二</sub>軍兵<sub>一</sub>，伐尽<sub>二</sub>百濟<sub>一</sub>。爰有<sub>二</sub>少許遺衆<sub>一</sub>，聚<sub>二</sub>居倉下<sub>一</sub>。兵糧既尽，憂泣茲深。於<sub>レ</sub>是高麗諸將言<sub>二</sub>於王<sub>一</sub>曰，百濟心許非常，臣每<sub>レ</sub>見之。不<sub>レ</sub>覺自失。恐更蔓生。請遂除之。王曰，不<sub>レ</sub>可矣。寡人聞，百濟国者日本国之官家所<sub>二</sub>由來<sub>一</sub>遠久矣。又其王入仕<sub>二</sub>天皇<sub>一</sub>，四隣之所<sub>二</sub>共識<sub>一</sub>也。遂止之。〈百濟記云，蓋鹵王乙卯年冬，貊大軍來攻<sub>二</sub>大城<sub>一</sub>七日七夜，王城降陷，遂失<sub>二</sub>尉礼国<sub>一</sub>。王及太后・王子等，皆没<sub>二</sub>敵手<sub>一</sub>。〉

08『日本書紀』武烈四年是歲条

百濟末多王無道暴<sub>二</sub>虐百姓<sub>一</sub>。国人遂除而立<sub>二</sub>嶋王<sub>一</sub>。是為<sub>二</sub>武寧王<sub>一</sub>。〈百濟新撰云，末多王無道暴<sub>二</sub>虐百姓<sub>一</sub>。国人共除武寧王立。諱斯麻王。是琨支王子之子。則末多王異母兄也。琨支向<sub>レ</sub>倭時，至<sub>二</sub>筑紫嶋<sub>一</sub>，生<sub>二</sub>斯麻王<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>嶋還送，不<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>於京<sub>一</sub>，產<sub>二</sub>於嶋<sub>一</sub>。故因名焉。今各羅海中有<sub>二</sub>主嶋<sub>一</sub>。王所<sub>レ</sub>產嶋。故百濟人号为<sub>二</sub>主嶋<sub>一</sub>。今案嶋王是蓋鹵王之子也。末多王，是琨支王之子也。此曰<sub>二</sub>異母兄<sub>一</sub>，未詳<sub>レ</sub>也。〉

09『日本書紀』繼體三年二月条

遣<sub>二</sub>使于百濟<sub>一</sub>。〈百濟本記云，久羅麻致支弥從<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>來。未詳。〉括<sub>下</sub>出在<sub>二</sub>任那日本県邑<sub>一</sub>百濟百姓，浮逃絶<sub>レ</sub>貫三四世者<sub>上</sub>，並遷<sub>二</sub>百濟<sub>一</sub>附<sub>レ</sub>貫也。

10『日本書紀』繼體七年六月条

百濟遣<sub>二</sub>姐弥文貴將軍・洲利即爾將軍<sub>一</sub>，副<sub>二</sub>穗積臣押山<sub>一</sub>。〈百濟本記云，委意斯移麻岐弥。〉

11『日本書紀』繼體九年二月丁丑条

百濟使者文貴將軍等請<sub>レ</sub>罷。仍勅，副<sub>二</sub>物部連<sub>一</sub>〈闕<sub>レ</sub>名。〉遣<sub>二</sub>罷歸<sub>一</sub>之。〈百濟本記云，物部至至連。〉

12『日本書紀』繼體二十五年冬十二月庚子条

葬<sub>二</sub>于藍野陵<sub>一</sub>。〈或本云，天皇，廿八年歲次甲寅崩。而此云<sub>二</sub>廿五年歲次辛亥崩<sub>一</sub>者，取<sub>二</sub>百濟



本記<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>文。其文云，太歲辛亥三月，師進至<sub>二</sub>于安羅<sub>一</sub>，營<sub>二</sub>乞毛城<sub>一</sub>。是月，高麗弑<sub>二</sub>其王安<sub>一</sub>。又聞，日本天皇及太子・皇子，俱崩薨。由<sub>レ</sub>此而，辛亥之歲當<sub>二</sub>廿五年<sub>一</sub>矣。後勘校者，知之也。〉

13『日本書紀』欽明二年七月条

別以<sub>二</sub>安羅日本府河内直通<sub>一</sub>計新羅<sub>一</sub>，深責罵之。〈百濟本記云，加不至費直・阿賢移那斯・佐魯麻都等。未<sub>レ</sub>詳也。〉

14『日本書紀』欽明五年二月条

又津守連從日本來，〈百濟本記云。津守連已麻奴跪。而語訛不正。未詳。〉

15『日本書紀』欽明五年二月条

別謂<sub>二</sub>河内直<sub>一</sub>，〈百濟本記云，河内直・移那斯・麻都。而語訛未<sub>レ</sub>詳<sub>二</sub>其正<sub>一</sub>也。〉

16『日本書紀』欽明五年二月条

汝先祖等〈百濟本記云，汝先祖那干陀甲背・加臘直岐甲背。亦云那哥陀甲背・鷹哥岐弥。語訛未<sub>レ</sub>詳。〉

17『日本書紀』欽明五年二月条

為哥可君〈百濟本記云，為哥岐弥，名有非岐。〉

18『日本書紀』欽明五年三月条

乃遣<sub>レ</sub>使召<sub>二</sub>日本府<sub>一</sub>〈百濟本記云，遣<sub>二</sub>召烏胡跛臣<sub>一</sub>。蓋是的臣也。〉与<sub>二</sub>任那<sub>一</sub>。

19『日本書紀』欽明五年三月条

夫任那者以<sub>二</sub>安羅<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>兄，唯從<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>。安羅人者以<sub>二</sub>日本府<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>天，唯從<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>。〈百濟本記云，以<sub>二</sub>安羅<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>父，以<sub>二</sub>日本府<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>本也。〉

20『日本書紀』欽明五年三月条

於<sub>二</sub>印支弥後來許勢臣時<sub>一</sub>，〈百濟本記云，我留<sub>二</sub>印支弥<sub>一</sub>之後至既酒臣時。皆未<sub>レ</sub>詳。〉

21『日本書紀』欽明五年十月条

百濟使人奈率得文・奈率哥麻等罷歸。〈百濟本記云，冬十月，奈率得文・奈率哥麻等，還<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>曰，所<sub>レ</sub>奏河内直・移那斯・麻都等事，無<sub>二</sub>報勅<sub>一</sub>也。〉

22『日本書紀』欽明六年是歲条

高麗大乱，被<sub>二</sub>誅殺<sub>一</sub>者衆。〈百濟本記云，十二月甲午，高麗国細群与<sub>二</sub>龜群<sub>一</sub>，戰<sub>二</sub>于宮門<sub>一</sub>。伐<sub>レ</sub>鼓戰鬪。細群敗不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>兵三日，尽捕<sub>二</sub>誅細群子孫<sub>一</sub>。戊戌，貊国香岡上王薨也。〉

23『日本書紀』欽明七年是歲条

高麗大乱。凡鬪死者二千余。〈百濟本記云，高麗以<sub>二</sub>正月丙午<sub>一</sub>，立<sub>二</sub>中夫人子<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>王。年八歲。貊王有<sub>二</sub>三夫人<sub>一</sub>。正夫人無<sub>レ</sub>子。中夫人生<sub>二</sub>世子<sub>一</sub>。其舅氏龜群也。小夫人生<sub>レ</sub>子。其舅氏細群也。及<sub>二</sub>貊王疾篤<sub>一</sub>。細群・龜群，各欲<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>其夫人之子<sub>一</sub>。故細群死者，二千余人也。〉

24『日本書紀』欽明十一年二月庚寅条

遣<sub>レ</sub>使詔<sub>二</sub>于百濟<sub>一</sub>。〈百濟本記云，三月十二日辛酉，日本使人阿比多率<sub>二</sub>三舟<sub>一</sub>，來<sub>二</sub>至都下<sub>一</sub>。〉

25『日本書紀』欽明十一年四月庚辰条

在<sub>二</sub>百濟日本王人<sub>一</sub>，方欲<sub>レ</sub>還之。〈百濟本記云，四月一日庚辰，日本阿比多還也。〉百濟王聖明謂<sub>二</sub>王人<sub>一</sub>曰，任那之事奉<sub>レ</sub>勅堅守。延那斯・麻都之事，問与<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>問，唯從<sub>レ</sub>勅之。因献<sub>二</sub>高麗奴六口<sub>一</sub>，別贈<sub>二</sub>王人奴一口<sub>一</sub>。〈皆攻<sub>二</sub>爾林<sub>一</sub>，所<sub>レ</sub>禽奴也。〉

26『日本書紀』欽明十七年正月条

別遣<sub>二</sub>筑紫火君<sub>一</sub>、〈百濟本記云、筑紫君兄火中君弟。〉

この26条以外にも用字法が共通することから、註引用よりも先行して、対外関係を記した欽明紀以前の本文の作成にも多く利用されたことが想定され、引用の仕方については要約型・原文型・複合型の3類型が指摘されていることは前述した。

## 【神功紀と百濟記の関係】

まず、百濟三書が通史的な歴史書であるのか、それとも特定の王代を対象とするかについて検討したい。三書の記述範囲は、『日本書紀』の注記内容によれば、

百濟記——①肖古王の治世～⑧蓋鹵王の死去

百濟新撰——⑦毗有王の即位～⑪武寧王の即位

百濟本記——⑪武寧王の治世～⑬威徳王の即位

という記載になる。<sup>(38)</sup>重複しているのは⑦毗有王と⑧蓋鹵王の時代である。とりわけ問題となるのは雄略紀に「百濟記」が引用された部分である。

### 07『日本書紀』雄略二十年冬条(前掲)

これは、475年における百濟滅亡記事についての記載に注記したものである。「百濟記」についての直前の註引用は、神功紀と応神紀までに限定されているため、飛び離れての引用という意味でやや特異な扱いになっていることが指摘できる。したがって、雄略紀本文の基礎史料には、「百濟記」ではなく、「百濟新撰」が使用されたとするのが自然であり、本文成立後に「百濟記」による記載を付加したと考えられる。

すなわち、「百濟記」の内容が『日本書紀』本文に反映したのは神功紀と応神紀のみであり、かつ応神39年(戊辰=308→修正428年)から雄略2年(己巳=429年)までの120年の間、百濟関係記事が存在しないので、『日本書紀』の編年では「百濟記」の記載を干支二巡=120年(木羅斤資とその子木満致に関する記述はさらに干支一巡=60年)さかのぼらせていることが指摘されている。<sup>(39)</sup>応神紀の新齊都媛(「百濟記」を原史料とするか)と雄略紀の池津媛の伝承が、時期を隔てて類似していることもこの年紀の問題に由来すると考えられる。<sup>(40)</sup>

『日本書紀』応神三十九年二月条

百濟直支王遣<sub>二</sub>其妹新齊都媛<sub>一</sub>以令<sub>レ</sub>任。爰新齊都媛率<sub>二</sub>七婦女<sub>一</sub>而来帰焉。

### 05『日本書紀』雄略二年七月条(前掲)

逆にいえば、「百濟記」の前半の記載は干支の実年代では用いられていないことになり、04 応神紀二十五年条の甲寅年(294→修正414)から07 雄略紀二十年条の乙卯年(475)まで、60年の空白の年代が生じることとなる(雄略5年の記事は雄略2年の記事と連動し「百濟新撰」により補われたものと推測され、少なくとも「百濟記」ではない<sup>(41)</sup>)。その時期の百濟王は、毗有王(422～455)であるが、『日本書紀』にはこの王についての記載がまったくないことも問題となる。05の雄略2年は己巳=429年に相当し、「百濟新撰」が「己巳年、蓋鹵王立」とするのは、毗有王の誤りであり、「百濟新撰」には本来「毗有王」と正しく記載してあったが、『日本書紀』編者により意図的な改変が加えられたと考えられる。<sup>(42)</sup>『日本書紀』は干支二巡の繰り上げを調整するため、「百濟新撰」に書かれていた毗有王の即位を認めない立場を取り、この点に限れば、原文への潤色があったことにな

る。07の記載によれば、「百済記」には蓋鹵王の年代までの記載があったにもかかわらず、腆支（直支）王の死去と久爾辛王の即位までしか本文に反映していない（ただし、『三国史記』百済本紀は420年の即位として6年の差がある）。

以上によれば、「百済記」は蓋鹵王の死去までの記載が存在したと考えられるが、『日本書紀』本文には神功紀と応神紀、すなわち腆支（直支）王の死去までしか採用されず、さらに、木羅斤資とその子木満致に関する記述はさらに干支三巡=180年さかのぼらせているので、本来は「百済記」に存在した以下の記述を移動させたと考えられる。

肖古王甲子（364）年 → 神功紀四十六（246）年条本文<sup>(43)</sup>

百済と卓淳国との通交記事

肖古王己巳（369）年 → 神功紀四十九（249）年条本文<sup>(44)</sup>

倭国と百済の通交開始記事

毗有王己巳（429）年 → 神功紀四十九（249）年条本文

木羅斤資の征討記事

毗有王壬午（442）年 → 神功紀六十二（262）年条所引「百済記」02

木羅斤資の加羅征討記事

蓋鹵王甲寅（474）年 → 応神紀二十五（294）年条本文と所引「百済記」04<sup>(45)</sup>

木満致の国政担当と父木羅斤資の回顧記事

蓋鹵王乙卯（475）年 → 雄略紀二十（476）年条所引「百済記」07

高句麗来攻、百済滅亡記事

したがって、「百済記」に記載されていた毗有王・蓋鹵王の記事の多くは神功紀と応神紀に移したため、雄略紀本文の百済関係記事を「百済記」により記述することができなくなり、他の史料により穴埋めする必要が生じたことになる。そのため雄略紀は、「日本旧記」（雄略二十一年三月条分注）、日本側氏族伝承（雄略五年四月条）などにより本文が記述され、新たに「百済新撰」により補われたと推測される。「百済記」蓋鹵王乙卯（475）年条の百済滅亡記事は、神功紀と応神紀に使用されなかったもので、例外的に註として引用されと考えられる。「百済記」と「百済新撰」の記載が重なっているのは、『日本書紀』の編纂方針によるもので、本来は「百済記」と「百済本記」により、王統譜に異説があった⑨文周王や⑩東城王などの数代を除き百済王統譜が相互補完的に語られていたが、「百済記」の後半が神功紀と応神紀に繰り上げられたため、毗有王の即位を認めない立場から雄略紀の依拠史料に空白が生じ、新たに「百済新撰」が⑦毗有王の即位～⑪武寧王の即位に至る系譜上の空白を補完し、かつその間の事績を語るものとして必要とされたと考えられる。おおむね、系譜的に問題がない直系継承がなされた①肖古王の治世～⑧蓋鹵王の死去を「百済記」が記載し、⑫義慈王の直接の祖である⑬武寧王の治世～⑭威徳王の即位までを「百済本記」により記載するもので、「百済新撰」が新たにそれを補完したものと位置付けられる<sup>(46)</sup>。

以上によれば、百済三書はそれぞれが通史的な歴史書ではなく、王系の異なる特定の王代を対象とした部分的なものと結論できる。しかもすでに指摘されているように、百済史一般を記述したのではなく、百済と日本との関係、とりわけ加羅諸国及び南韓地域に対する百済の特殊権益の主張を主題とした特殊史的なもので、「百済記」は6世紀の聖明王代の理想を、過去の肖古王代に投影し、

日本に対して百済が主張する歴史的根拠を意識して撰述されたと考えられる。

なお、雄略紀に引用された「百済記」には「蓋鹵王乙卯年冬」という王代と干支が併記されており、本来はこの形式で記録されており、神功紀や応神紀の引用にあたっては王代を抹消して実年代を繰り上げる作為がなされたと考えられる。<sup>(47)</sup>もしそうだとすれば、池内宏・末松保和説のように神功紀に配列された甲子・丁卯・己巳・壬申年という干支の記載を「百済記」由来のものとして尊重し、甲子（364）年と己巳（369）年の間に、百済王と倭王の交渉、百済王が倭王に帰服し、倭王が新羅討伐の軍を出したこと、加羅七国平定記事などを「百済記」に記載されていたと判断することも可能となる。しかし、4世紀後半の確実な史実として百済と卓淳国との通交記事、および倭国と百済の通交開始記事以外には確認されず、明らかに神功紀編纂段階における付加された木羅斤資の征討記事や、「百済記」の表記とは異なる「荒田別・鹿我別」の伝承などが挿入されており、甲子年と己巳年以外の年紀は必ずしも重視できず、「百済記」には物語として明瞭な年紀がなかったか、<sup>(48)</sup>神功紀が移動させた可能性が高いと考える。

## 【百済系氏族の祖先伝承と百済三書】

今西竜氏の指摘を尊重すれば、「百済本記」の意味は、単なる歴史書ではなく、『三国史記』百済本紀のような一系的な王統譜が作成される以前には、断絶した王系ごとに百済遺民の出自や奉仕の根源を語るものであったと考えられる。<sup>(49)</sup>さらに三品彰英氏により、数多い百済王の後裔と称する百済系諸蕃のうち、最も多くの、かつ有力諸氏が族祖と伝説するのが肖古・貴首の二王であり、蓋鹵王から武寧王に至る五王は、史記・遺事・書紀三書の諸伝が相違しているとの指摘が注目される。<sup>(50)</sup>

『新撰姓氏録』にみえる百済系氏族のうち、百済王の末裔を称する氏族を整理するならば以下のようなになる。「百済記」には見えない、肖古王以前の伝説的な王の末裔を称するのは以下の氏族である。すでに、三品彰英氏や山尾幸久氏による同様な作業もあるが、必ずしも網羅的でなく、王代の比定が異なる部分もあるので、再検討を加えた。<sup>(51)</sup>

都慕王孫—百済伎(右京諸蕃下)

温祚王—河内連(河内国諸蕃)？

肖古王—大丘連(左京諸蕃下)・己汶氏(右京諸蕃下)・真野造(右京諸蕃下)

沙伴王—半毗氏(右京諸蕃下)

比流王—春野連(右京諸蕃下)・面氏(右京諸蕃下)・汶斯氏(右京諸蕃下)・岡屋公(山城国諸蕃)・

広井連(山城国諸蕃)

さらに、百済三書と関係する時期の百済王の後裔氏族は以下のようにまとめられる。

①肖古王—石野連(左京諸蕃下)・三善宿禰(右京諸蕃下)・錦部連(河内国諸蕃)・錦部連(和泉国諸蕃)

②貴首王—菅野朝臣(右京諸蕃下)・葛井宿禰(右京諸蕃下)・宮原宿禰(右京諸蕃下)・津宿禰(右京諸蕃下)・中科宿禰(右京諸蕃下)・船連(右京諸蕃下)・鴈高宿禰(右京諸蕃下)・



広津連(右京諸蕃下)・船連(摂津国諸蕃)

- ④辰斯王—岡原連(河内国諸蕃)
- ⑥腆支王—林連(河内国諸蕃)
- ⑦毗有王—安勅連(右京諸蕃下)?・不破連(右京諸蕃下)・飛鳥戸造(右京諸蕃下)
- ⑨文周王—百濟公(左京諸蕃下)?・広幡公(未定雑姓) 琨伎王—飛鳥戸造(河内国諸蕃)
- ⑩東城王—飛鳥戸造(河内国諸蕃)
- ⑪武寧王—和朝臣(左京諸蕃下)
- ⑫聖明王—市往公(右京諸蕃下)・岡連(右京諸蕃下)
- ⑭恵王—百濟朝臣(左京諸蕃下)
- ⑯武王—古市村主(河内国諸蕃)?
- ⑰義慈王—百濟王(左京諸蕃下)

まず菅野朝臣一族などのように肖古・貴首の二王の後裔を称する氏族が多く、百済系氏族の中心である百済王氏は義慈王の末裔を称していることが確認される。前述したように「百済記」は①肖古王の治世～⑧蓋鹵王の死去、「百済新撰」は⑦毗有王の即位～⑪武寧王の即位、「百済本記」は、⑪武寧王の治世～⑬威徳王の即位を対象としている。「百済新撰」の時期においても、百済公(文周王)、飛鳥部戸(毗有王・琨伎王・東城王)、和朝臣(武寧王)などの有力氏族が存在することは注目される。おそらく、これらの氏族が、自己の出自や奉仕の根源を語るために百済三書の編集を主導した可能性が指摘できる。

とりわけ、雄略紀・武烈紀において、武寧王の出自について昆支の子、末多(東城)王の異母兄とする「百済新撰」の説を否定し、武寧王の出自を蓋鹵王の子として解釈している点に重要な意味がある。また、以下のように、

『日本書紀』本文——池津媛 / 加須利君 / 軍君 / 嶋君

「百済新撰」——適稽女郎 / 蓋鹵王 / 琨支君 / 斯麻王

本文と「百済新撰」には明らかな用字の違いが認められ、津田左右吉氏の指摘があるように異なる原史料を用いていたことが推定される。

#### 05 『日本書紀』雄略二年七月条(前掲)

『日本書紀』雄略五年四月条

百済加須利君(蓋鹵王也)飛聞池津媛之所燔殺(適稽女郎也),而籌議曰,昔貢女人為采女。而既無礼。失我国名。自今以後,不令貢女。乃告其弟軍君(崑支君也)曰,汝宜往日本以事天皇。軍君对曰,上君命不可奉違。願賜君婦而後奉遣。加須利君則以孕婦,既嫁与軍君曰,我之孕婦既当産月。若於路産,冀載一船,隨至何処速令送国。遂与辞訣奉遣於朝。

『日本書紀』雄略五年六月丙戌条

孕婦果如加須利君言,於筑紫各羅嶋産兒。仍名此兒曰嶋君。於是軍君即以一船送嶋君於国。是為武寧王。百済人呼此嶋君曰主嶋也。

#### 06 『日本書紀』雄略五年七月条(前掲)

08『日本書紀』武烈四年是歲条(前掲)

『日本書紀』武烈七年四月条

百濟王遣<sub>レ</sub>期我君<sub>二</sub>進調。別表曰、前進調使麻那者、非<sub>二</sub>百濟国主之骨族<sub>一</sub>也。故謹遣<sub>二</sub>斯我<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>事<sub>二</sub>於朝<sub>一</sub>。遂有<sub>レ</sub>子。曰<sub>二</sub>法師君<sub>一</sub>。是倭君之先也。

武寧王の出自について、記された後に、百濟王(武寧王)の「骨族」である「期我君」が来朝して、子孫の「法師君」が「倭君の祖」となったとある。これは後の『続日本紀』や『新撰姓氏録』にみえる和朝臣(武寧王後裔)や飛鳥戸造(現伎王後裔)の伝承と基本的に対応している。

『続日本紀』延暦九年正月壬子条

葬<sub>二</sub>於大枝山陵<sub>一</sub>。皇太后、姓和氏、諱新笠。贈正一位乙繼之女也。母贈正一位大枝朝臣真妹。后先出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>百濟武寧王之子純陀太子<sub>一</sub>。

『新撰姓氏録』左京諸蕃下

和朝臣 出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>百濟国都慕王十八世孫武寧王<sub>一</sub>也。

『新撰姓氏録』河内国諸蕃

飛鳥戸造 出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>百濟国主比有王男現伎王<sub>一</sub>也。

ただし、諸伝承を総合すれば、和朝臣には、

武寧王—純陀太子—期我君—法師君(和君の祖)…和史…和朝臣

という系譜的主張が確認されるが、和朝臣が純陀太子の末裔と称するのは、延暦8年以前に和氣清麻呂の撰上による「和氏譜」<sup>(52)</sup>に依拠して仮託したもので、必ずしも本来的ではなかったと考えられる。<sup>(53)</sup>  
<sup>(54)</sup>

以上の検討によれば、和朝臣(倭君)と飛鳥戸造の祖先伝承が一連の雄略・武烈紀の伝承に反映していることが確認される。蓋鹵王と武寧王との直接の親子関係により、自己の氏族の優位性を主張する和朝臣(倭君)の主張と、軍君(昆支)の来日と5人の子供の誕生という飛鳥戸造の主張が、合成されて『日本書紀』本文に反映されたと考えられ、そして「百濟新撰」は新たに⑦毗有王の即位～⑪武寧王の即位を語ることで、その他傍系王族の後裔を称する多くの百濟貴族たちの共通認識をまとめたものと位置付けられる。<sup>(55)</sup>一系的な王統譜の作成という動き(『日本書紀』)と、断絶した王系ごとに百濟遺民の出自や奉仕の根源を語る動き(「百濟新撰」)が互いにせめぎ合っており、妥協的な表現になっていると評価される。

ここでは百濟三書が、一系的な王統譜が作成される以前において、断絶した王系ごとに百濟遺民の出自や奉仕の根源を語るものであったことを論じ、とりわけ「百濟新撰」は、蓋鹵王と武寧王との直接的な親子関係により一系的な位置付けをする『日本書紀』本文の主張に対して、武寧王の父を昆支として、断絶した毗有王から武寧王の王系(とりわけ、『南齊書』百濟伝によれば、文周王と東城王は「余」姓ではなく「牟」姓を対外的に使用した)<sup>(56)</sup>を主張するものであったことを論じた。日本に対して迎合的な記載が目立つ「百濟記」や「百濟本記」と比較すれば、「百濟新撰」は「倭」「大倭」などの表記があるように中立的であり、『日本書紀』本文とは異なる主張により、注として用いられていること、<sup>(57)</sup>「新撰」の名称などを重視すれば、『日本書紀』本文に採用された他の二書よりも遅く成立し、『日本書紀』成立の直前期である8世紀初頭とするのが妥当と考えられる。

## 【百済記と貴国】

冒頭において、百済三書には「天皇」や「日本」など、明らかに7世紀後半以降に使用が開始された用語が含まれ、『日本書紀』編者の潤色改変を想定できる箇所があり新しい要素が存在すること、これに対して三書の用字がそれぞれ統一されず、古い推古期の用字を用いていることから、原史料の古さが想定されており、相反する2つの要素をどのように整合的に考えるかについて論争が継続していることを述べた。百済三書の成立年代を考える場合、「天皇」「天朝」「日本」「貴国」のような「こびへつらったいやな称」がいつの段階で書き込まれたのかについて、論者により見解が大きく相違しているため、年代決定の大きな障害になっている。少なくとも「日本」号の年代について7世紀後半以降とすることについて大きな異論はないと思われるが、単なる潤色と解するか、すでに原史料に書き込まれていたかについては議論がある。とりわけ、見解が相違するのは「貴国」の解釈である。

「日本」「天皇」などの新しい要素を重視して、『日本書紀』による改変や潤色あるいは、百済系遺民による編纂献上を想定する山尾幸久説においては、「百済記」にみえる「貴国」も「可畏天皇」に通じる「蕃国」と対になる呼称であり、百済王氏を諸蕃に位置付ける7世紀後半の歴史的自己認識の反映と解釈している。これに対して、遠藤慶太氏は、「貴国」に「蕃国」の意味がないこと、中国正史にない太歳紀年の採用などを根拠として、百済系フミヒトを担い手とする推古期における三書の編纂を想定する。

このように「貴国」の解釈については、「蕃国」に対応させた冊封臣従関係を示す用語として位置付ける議論と、特別な意味を認めない対等的関係として位置付ける議論が対立している。

まず確認すべきは、「天皇」の用語が三書共通に用いられているのに対して、「貴国」の用語は「百済記」にのみみえる用語で（貴国の用例は神功紀と応神紀に七例あり、そのうち3例が「百済記」の引用文）、古い時期の百済と倭国の関係を示す用語として用いられている。これに対して、主に「百済新撰」は「倭」「倭国」、百済本記は「日本」の用語を使用し、『日本書紀』はこれらの用語を統一していないことが前提として指摘できる。

「貴国」については栗原朋信氏の議論が注目される。<sup>(58)</sup> まず栗原氏は、『三国史記』だけでなく、日本側の記録にも「結好」「修好」「和好」等の対等関係を示す用語が見られることを重視し、両国が対等水平的関係にあったことに注目する。さらに以下の応神紀の例に典型的なように、傾斜関係の「貴国」と水平関係の「修<sub>ニ</sub>先王之好<sub>ニ</sub>」すなわち「修好」の用字がセットで用いられていることを問題視する。

### 03 『日本書紀』応神八年三月条（前掲）

そして、相手国に対する敬語として「貴国」を用いるようになるのは後代のことであり、中国古典には大きい目上の国、すなわち大国の意味で用いられた例を指摘し、傾斜関係にある「上位の大国」の意味で、後世の用法にみえる水平的な立場にある相手国へ対する敬称でも、君臣関係を示す用語でもないことを指摘する。さらに、「結好」「修好」「和好」等の対等関係を示す用語は君臣関係では用いないが、基本的に対等の立場にある傾斜関係なら用いてよいとする。

具体的には、『国語』周語中において、周王の使節として陳に派遣された使者（単子）が外交の

待遇を「敵国」「貴国」「王使」「王」で序列を設けることを説く部分において、三国時代の呉人である韋昭の注では、「敵国」について「敵，位敵也」，「貴国」について「貴国，大国也」と解している。すなわち，敵国とは地位が対等の匹敵の国，貴国とは自国よりも上位の大国とする。

君臣関係を示す，天皇・天朝などの用語を除けば，「百済記」の原文には「修好」とともに「貴国」の用字が存在したと解され，「百済記」の時期における百済と倭国の関係は君臣関係ではないが，倭国を上位とする傾斜的關係にあったとする。

基本的に首肯される考え方で，「百済本記」を基礎とする本文においても，百済は加耶諸国を「子弟」，百済を「父兄」と位置付ける傾斜的な「百済本位の書き方」をしていたことに注目するならば，この関係を応用したものとの解釈が成り立つ。

### 13『日本書紀』欽明二年七月条(前掲)

百済の立場からは，倭国>百済>加耶諸国という相対的な序列で位置付けていたと考えられる。冊封・君臣関係ではないが，さりとて，まったく対等な関係でもない「第三の傾斜的關係」として百済と倭国の関係を位置づけるべきものとする。冊封・君臣関係でも，対等平等な関係でもない，「第三の傾斜關係」というこうした概念の設定は有効と思われる。「貴国」の解釈をめぐる，従来の従属か対等かという単純な二項対立的な論争は，「第三の傾斜關係」という枠組みを設定することで止揚されるのではないかと考える。百済が倭国に対して「結好」「修好」「和好」という君臣関係ではない，基本的に対等な関係を望みながら，百済が倭国を大国＝貴国と「敬仰」する形式的上位の国としても位置付けていたこととの関係が合理的に説明できると考えられる。ちなみに，「百済本記」の記述範囲である欽明紀においても，百済聖明王の子，余昌が「大国」＝貴国＝日本に仕えていることにより新羅征討を諸臣に納得させようとする話がみえる。

『日本書紀』欽明十五年十二月条

余昌曰，老矣，何怯也。我事<sub>二</sub>大国<sub>一</sub>，有<sub>二</sub>何懼<sub>一</sub>也。

『隋書』倭国伝

新羅・百済皆以<sub>レ</sub>倭為<sub>二</sub>大国多<sub>二</sub>珍物<sub>一</sub>，並敬<sub>二</sub>仰之<sub>一</sub>，恆通<sub>レ</sub>使往来。

結論として加藤謙吉氏が指摘するように，三書は共通の目的で組織的に編纂されたのであり，表記上の相違も『日本書紀』との対応関係に立って，時代に適応した叙述法が求められた結果と解するのが妥当と思われる。

なお，栗原氏は雄略五年条所引の「百済新撰」に「修好」の表現を用いて以後は，史料に「結好」「修好」「和好」という基本的に対等な表現は用いられなくなり，欽明紀十五年条には「百済本記」を基礎とした倭国への上表文に「百済王臣明」の表記が見られるようになるとの指摘もされている。<sup>(59)</sup>なお，『三国史記』百済本紀においては，毗有王2(428)年以降，7世紀の義慈王13(653)年まで対倭関係記事が見られなくなるが(新羅と倭国の交渉記事も500年から665年まで記載がない)，唐突に倭国との「通好」記事が復活することも留意される。

### 06『日本書紀』雄略五年七月条所引「百済新撰」(前掲)

『日本書紀』欽明十五年十二月条

百済遣<sub>二</sub>下部杆率汝斯干奴<sub>一</sub>，上表曰，百済王臣明及在<sub>二</sub>安羅<sub>一</sub>諸倭臣等，任那諸国早岐等奏，以斯羅無道，不<sub>レ</sub>畏<sub>二</sub>天皇<sub>一</sub>。与<sub>レ</sub>伯同心欲<sub>レ</sub>残<sub>二</sub>滅海北弥移居<sub>一</sub>。臣等共議，遣<sub>二</sub>有至臣等<sub>一</sub>，仰乞<sub>二</sub>



軍士<sub>二</sub>，征<sub>二</sub>伐斯羅<sub>一</sub>。……

『三国史記』義慈王十三年条（653 年）

王与<sub>二</sub>倭国<sub>一</sub>通<sub>レ</sub>好。

この点を重視するならば、「百済記」「百済新撰」と「百済本記」の間に、王系の変化だけでなく、百済と倭国の関係が、倭国側の意識の上で傾斜関係から君臣関係に変化した可能性も指摘できる。それは、雄略期における百済の一時的滅亡と、倭国の援助による百済の再興<sup>(60)</sup>が大きな画期であり、倭国の天下観にも大きな影響を与えたと想定される。

07『日本書紀』雄略二十年冬条所引「百済記」(前掲)

『宋書』倭国伝昇明二（四七八）年条倭王武上表文

封国偏遠，作<sub>二</sub>藩于外<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>昔祖禰，躬擐<sub>二</sub>甲冑<sub>一</sub>，跋<sub>二</sub>涉山川<sub>一</sub>，不<sub>レ</sub>遑<sub>二</sub>寧処<sub>一</sub>。東征<sub>二</sub>毛人五十五国<sub>一</sub>。西服<sub>二</sub>衆夷六十六国<sub>一</sub>，渡平<sub>二</sub>海北九十五国<sub>一</sub>。王道融泰，廓<sub>二</sub>土遐畿<sub>一</sub>。

古く 5 世紀初頭に倭国に質として送られていた腆支（直支）王に兵士を付して百済に送還して即位を援助したこと（百済本紀，応神紀），直接的には 475 年の対高句麗戦の大敗により滅亡の危機に瀕した百済へ，倭国は末多（東城）王に筑紫の軍士を付して送還し，やがて即位させたこと（雄略紀），などが指摘できる。

『三国史記』百済本紀腆支王即位前紀（405 年）

腆支在<sub>レ</sub>倭聞<sub>レ</sub>訃。哭泣請<sub>レ</sub>歸。倭王以<sub>二</sub>兵百人<sub>一</sub>衛送。既至<sub>二</sub>国界<sub>一</sub>。

『日本書紀』応神十六年是歳条

百済阿花王薨。天皇召<sub>二</sub>直支王<sub>一</sub>謂之曰，汝返<sub>二</sub>於国<sub>一</sub>以嗣<sub>レ</sub>位，仍且賜<sub>二</sub>東韓之地<sub>一</sub>而遣之。〈東韓者甘羅城・高難城・爾林城是也。〉

『日本書紀』雄略二十三年四月条

百済文斤王薨。天皇以<sub>二</sub>昆支王五子中<sub>一</sub>，第二末多王幼年聰明<sub>一</sub>，勅喚<sub>二</sub>内裏<sub>一</sub>，親撫<sub>二</sub>頭面<sub>一</sub>，誠勅慰勲，使<sub>レ</sub>王<sub>二</sub>其国<sub>一</sub>。仍賜<sub>二</sub>兵器<sub>一</sub>，并遣<sub>二</sub>筑紫国軍士五百人<sub>一</sub>，衛<sub>二</sub>送於国<sub>一</sub>。是為<sub>二</sub>東城王<sub>一</sub>。

こうした百済王権に対する倭国によるたびたびの政治的・軍事的介入が，倭国による自己中心的な世界観が形成される 1 つの契機になったと考えられる。

しかしながら，倭国側の意識としては，後述する日本天皇による百済王の冊封という事実を前提に，雄略紀以降，臣従関係に入ったとの意識が『日本書紀』本文には反映しているが，反対に百済側には必ずしもそうした強い意識はなかったと考えられる。すなわち，同じ欽明紀十五年十二月条に，倭国に対する百済の臣従表現である「百済王臣明」の表記とともに，傾斜関係である「大国」＝貴国＝日本の表現も併存しており，少なくとも百済側の原史料レベルでは，君臣関係に基づく統一的表記はなされていなかったことが確認される。おそらく，的臣に対する評価が「百済本記」内部で大きく分かれていることも「日本に対する迎合的態度」と「百済本位の書き方」という原史料の複雑さを示していると考えられる。

『日本書紀』欽明五年三月条

的臣等猶住<sub>二</sub>安羅<sub>一</sub>，任那之国恐難<sub>二</sub>建立<sub>一</sub>。宜<sub>二</sub>早退却<sub>一</sub>。

『日本書紀』欽明十四年八月丁酉条

別<sub>レ</sub>的臣敬受<sub>二</sub>天勅<sub>一</sub>。来撫<sub>二</sub>臣蕃<sub>一</sub>。夙夜乾乾，勤<sub>二</sub>修庶務<sub>一</sub>。由<sub>レ</sub>是，海表諸蕃，皆称<sub>二</sub>其善<sub>一</sub>。

謂当<sub>二</sub>万歳肅<sub>一</sub>清海表<sub>二</sub>。不幸云亡。深用追痛。今任那之事,誰可<sub>二</sub>修治<sub>一</sub>。伏願天慈速遣<sub>二</sub>其代<sub>一</sub>。  
以鎮<sub>二</sub>任那<sub>一</sub>。

欽明期以降においても、倭国との傾斜関係である「大国」表現および、対等的な「通好」表現が相変わらず残されていることを重視すれば、「百済本記」においてさえ倭国に対する百済の臣従意識は必ずしも強くなかったことになる。倭国との交渉は7世紀の百済滅亡まで継続するが、『三国史記』百済本紀に交渉記事が欠落するのは、『日本書紀』が倭の五王段階における中国に対する朝貢記事を載せないのと同じく、倭国との君臣関係を明示しないためであったとも考えられる。

## 【北敵としての狛国】

百済三書には、高句麗関係の記事が多く記載されており、そこから百済史一般の歴史書であったとの理解もなされている。しかしながら、475年の高句麗による百済の一時的滅亡記事が典型的なように、百済にとって倭国との交渉は、高句麗との関係に規定されている側面が強く見られるので、高句麗の動向が強く意識されたと考えられる。とりわけ、欽明紀には、高句麗をしばしば強大な敵として「強敵」「北敵」「狛賊」と表現し、「任那」や倭国と共同して戦う必要がある相手として表現されている。欽明期においても雄略期に高句麗のために百済が圧迫され、国家存亡の時であったことが回顧されている。

『日本書紀』欽明五年十一月条

唯庶尅<sub>二</sub>濟<sub>一</sub>多難<sub>二</sub>,殲<sub>二</sub>撲強敵<sub>一</sub>。凡厥凶党,誰不<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>附。北敵強大,我国微弱。

『日本書紀』欽明九年四月甲子条

宜<sub>下</sub>共<sub>二</sub>任那<sub>一</sub>,依<sub>二</sub>前勅<sub>一</sub>,戮<sub>レ</sub>力俱防<sub>二</sub>北敵<sub>一</sub>,各守<sub>上レ</sub>所<sub>レ</sub>封。

『日本書紀』欽明九年六月壬戌条

朕聞,汝国為<sub>二</sub>狛賊<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>害。宜<sub>下</sub>共<sub>二</sub>任那<sub>一</sub>,策勵同<sub>レ</sub>謀,如<sub>レ</sub>前防距<sub>上</sub>。

『日本書紀』欽明十一年二月庚寅条

朕聞,北敵強暴。故賜<sub>二</sub>矢卅具<sub>一</sub>。庶防<sub>二</sub>一處<sub>一</sub>。

『日本書紀』欽明十六年二月条

蘇我卿曰,昔在天皇大泊瀬之世,汝国為<sub>二</sub>高麗<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>逼,危甚<sub>二</sub>累卵<sub>一</sub>。

北の脅威を歴史的にも強調することにより、加耶諸国の併呑や倭国の派兵を要求するのが百済の外交方針であり、倭国も認識を共有していたとすれば、百済三書に高句麗の動向が詳細に書かれていることは必ずしも不思議ではない。

## 【百済三書成立の時期】

以上、雑駁な検討をおこなってきたが、最後に百済三書の成立時期について考えてみたい。考察したように、三書ともに基本的に王代と干支が記載された特殊史で、断絶した王系ごとに百済遺民の出自や奉仕の根源を語るもので、「百済記」は、「百済本記」が描く6世紀の聖明王代の理想を、過去の肖古王代に投影し、日本に対して百済が主張する歴史的根拠を意識して撰述されたもので、「百済新撰」は『日本書紀』本文とは異なる主張により、注として用いられていること、「新撰」の名称などから、『日本書紀』本文に採用された他の二書よりも遅く成立したこと、などが指摘でき

る。そのように位置付けるならば、亡命百済王氏の祖王の時代を記述した「百済本記」がまず成立し、百済と倭国の通交および、「任那」支配の歴史的正当性を描く目的から「百済記」が、さらに「百済新撰」は、系譜的に問題のあった⑦毗有王～⑪武寧王の時代を語るることにより、傍系王族の後裔を称する多くの百済貴族たちの共通認識をまとめたものと位置付けられる。

「百済本記」が複雑な編纂物で、『日本書紀』編者が、その原文をできるだけ統一せずに尊重していることを前提とするならば、成立が最も古いと推測される本書において「日本」号が用いられていたことは重要である。すなわち、大宝公式令詔書式条には「御宇日本天皇詔旨」（古記）とあり、「日本」と「天皇」がセットで用いられており、『旧唐書』日本伝の記載により、海外諸国に対して正式に「日本」号を用いたのが、「大宝令」の施行以後の遣唐使（702年出発）であるとすれば、三書の成立はいずれも八世紀初頭に位置付けるのが自然である。<sup>(61)</sup>

『旧唐書』日本伝

倭国自惡<sub>レ</sub>其名不<sub>レ</sub>雅，改為<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>。……長安三年，其大臣朝臣真人來貢<sub>二</sub>方物<sub>一</sub>。

雄略二十一年三月条分注に「日本」号を冠した「日本旧記」、同じく斉明紀と天智紀の5ヶ所（斉明六年七月乙卯条、同七年四月条、同十一月戊戌条、天智即位前紀〔釈道顯云〕、天智八年十月辛酉条）の分注にも高麗沙門道顕の「日本世記」が引用されているように、『日本書紀』が典拠とした外交史料が出揃うのは8世紀に入ってからであろうと推測される。<sup>(62)</sup>おそらく「日本」号を使用する「百済本記」を含む百済三書も同様の時期に成立した可能性が高い。

『日本書紀』雄略二十一年三月条

天皇聞<sub>下</sub>百済為<sub>二</sub>高麗<sub>一</sub>所<sub>上</sub>破，以<sub>二</sub>久麻那利<sub>一</sub>賜<sub>二</sub>汶洲王<sub>一</sub>，救<sub>二</sub>興其国<sub>一</sub>。時人皆云，百済国雖三属既亡聚<sub>二</sub>夏倉下<sub>一</sub>。実頼<sub>二</sub>於天皇<sub>一</sub>，更造<sub>二</sub>其国<sub>一</sub>。〈汶洲王盖鹵王母弟也。日本旧記云，以<sub>二</sub>久麻那利<sub>一</sub>，賜<sub>二</sub>末多王<sub>一</sub>。盖是誤也。久麻那利者任那国下哆呼利県之別邑也。〉

『日本書紀』斉明六年七月乙卯条

〈高麗沙門道顕日本世記曰。七月云云。……〉

従来、相対的に「百済本記」の成立が古く、「百済新撰」の成立が新しいとされてきたが、それとは逆に用語の上では「日本」「天皇」などの成立が新しい用語が「百済本記」にみられ、反対に「倭」「倭国」などの古い用語が「百済新撰」に見えることの説明が十分にはなされてこなかったと思われる。古い雑多な原史料を用いつつも、「百済王臣明」という倭国に対する百済の臣従表現、「日本天皇」「任那日本府」などの表記も、8世紀に入ってから国家意識と百済亡命貴族による迎合的な意識の反映とすれば、矛盾は少なくなる。「百済本記」は三書の中心的位置を占める書物で、とりわけ日本天皇と百済王との臣従関係を明らかにする必要があったと考えられる。継体紀の本文において1度定まっていた継体天皇の崩年を「百済本記」の記載により訂正していることも成立の時期を考える目安となる。

一方で、明らかな『日本書紀』の改変・潤色は先述したように、干支二巡さらには三巡の移動を前提とした神功紀の起源伝承、毗有王の削除などにみられた。逆に「百済記」の「貴国」，「百済新撰」の「倭」などの表記が古いのは、原史料に依拠して、時代に対応した外交表記がなされたためと考えられる。

従来、7世紀後半における三書の成立を想定していた大きな根拠は、百済滅亡による百済王の大

きな地位の変化をそこに読み取ったことによる。

すでに論じたように、応神紀十六年（是歳）条や雄略紀二十三年四月条にみえるような倭国の百済への介入以後も、「大国」＝「貴国」や君臣関係の表現、質や調の貢納という関係は存在したが、明確な冊封関係ではなかった。『日本書紀』の論理では継体・欽明期には封建の論理や君臣関係が強化されたとの認識が存在したが、客観的には冊封でも、対等でもない、大国朝貢体制とも呼ぶべき「第三の傾斜関係」が強化されたと評価とするのが妥当である。

しかし、天智元年には、明らかに倭国が百済王を冊封したと解される記事がある。すなわち、斉明の死後、中大兄が百済の王子豊璋に織冠位を与え、さらに百済王位を継がしめたとあり、「或本」には天皇が豊璋を王としたという直接的な表現も存在する。しかしながら、翌年には百済が滅亡し、権力機構としては解体し、多くの貴族とともに倭国に亡命移住することとなった。

『日本書紀』 齊明六年十月条

〈或本云、天皇立豊璋為王、立塞上為輔。而以礼発遣焉。〉

『日本書紀』 天智即位前紀、齊明天皇七年九月条

皇太子御長津宮。以織冠授於百済王子豊璋。

『日本書紀』 天智元年五月条

大將軍大錦中阿曇比羅夫連等、率船師一百七十艘、送豊璋等於百済国、宣勅、以豊璋等使繼其位。又予金策於福信、而撫其背、褒賜爵禄。于時豊璋等与福信、稽首受勅。衆為流涕。

『日本書紀』 天智二年九月丁巳条

百済州柔城、始降於唐。是時国人相謂之曰、州柔降矣。事無奈何。百済之名絶于今日。……遂教本在枕服岐城之妻子等、令知去国之心。

たしかに、以後百済王氏は、外交の相手ではなく、天武の殯において諸国国造とともに誄を奏上しているように、倭国の氏族と同じ扱いがなされ、ヤマト王権の秩序内の存在（王民）になったとみられる。

『日本書紀』 朱鳥元年九月丁卯是日条

百済王良虞代百済王善光而誄之。次国々造等随参赴、各誄之。仍奏種々歌舞。

しかし、寛敏生氏が指摘するように、百済の旧王号・旧官位や「余」姓の使用から、純粹に倭国の位階に移行するのにはしばらく時間を要している。<sup>(63)</sup>すなわち、百済王氏という倭国姓を前提とし、官人として出仕するようになるのは早くとも持統5年以降と判断される。

『日本書紀』 天武二年閏六月庚寅条

大錦下百済沙宅昭明卒。為人聰明叡智、時称秀才。於是天皇驚之、降恩以贈外小紫位、重賜本国大佐平位。

『日本書紀』 持統五年正月己卯条

賜公卿飲食・衣裳。優賜正広肆百済王余禪広・直大肆遠宝・良虞与南典各有差。

『続日本紀』 天平神護二年六月壬子条

刑部卿從三位百済王敬福薨。其先者、出自百済国義慈王。……藤原朝廷賜号曰百済王。

天武2年段階にはまだ、倭国の位階だけでなく、本国の位階を重ねて与えられており、持統5年段階



階にも百済王姓の賜与が確認されるが、まだ「余」姓を名乗っている点で過渡期な段階と位置付けられる。王族のような散位扱いではなく、明瞭に日本天皇の臣下となり、官人化するの、以下の例によれば、明らかに8世紀段階まで遅れる。

『続日本紀』文武四年十月己未条

直広参百済王遠宝為<sub>レ</sub>常陸守<sub>ニ</sub>。

『続日本紀』大宝三年八月辛酉条

以<sub>レ</sub>從五位上百済王良虞<sub>ニ</sub>為<sub>レ</sub>伊予守<sub>ニ</sub>。

蕃客から官人への質的転換がこの段階になされているとすれば、倭国の王民となった「百済王」氏にとって、その系譜と奉仕の根源を語ることが、他の氏族と同様に必要になったと考えられる。

こうした、百済王族のヤマト王権に対する奉仕の帰結として、平安初期には百済王氏は永年の課役免除がなされている。

『類聚三代格』卷十七 延暦十六年五月廿八日勅〔民中12〕

勅、百済王等遠慕<sub>ニ</sub>皇化<sub>ニ</sub>、航<sub>レ</sub>海梯<sub>レ</sub>山、輸<sub>レ</sub>款久矣、神功摂政之世、則肖古王遣<sub>レ</sub>使貢<sub>ニ</sub>其方物<sub>ニ</sub>、輕島御宇之年、則貴須王扱<sub>レ</sub>人献<sub>ニ</sub>其才士<sub>ニ</sub>、文教以<sub>レ</sub>之興蔚、儒風由<sub>レ</sub>其闡揚、煥乎賦々于<sub>レ</sub>今為<sub>レ</sub>盛、又属<sub>ニ</sub>新羅肆虐<sub>ニ</sub>并<sub>ニ</sub>吞扶余<sub>ニ</sub>、即拳<sub>レ</sub>宗帰<sub>レ</sub>仁、為<sub>ニ</sub>我土庶<sub>ニ</sub>、陳<sub>レ</sub>力從<sub>レ</sub>事、夙夜奉<sub>レ</sub>公、朕嘉<sub>ニ</sub>其忠誠<sub>ニ</sub>、情深衿愍、宜<sub>ニ</sub>百済王等課并雜徭<sub>ニ</sub>、永從<sub>ニ</sub>蠲除<sub>ニ</sub>、勿<sub>レ</sub>有所<sub>レ</sub>事、主者施行、

延暦十六年五月廿八日

百済王による「忠誠」が評価されてのことであるが、神功期の肖古王による方物献上、応神期の貴須王による人材の献上などがその功績として指摘されている。「百済記」を中心とする伝承が語られているが、ここで注意すべきは、すでに百済三書の百済王系ごとの分断された奉仕関係の記述ではなく、『三国史記』百済本紀に帰結するような、百済王氏を中心とする尚古王以来の連続的な奉仕や一系的なあり方に変化してしまっていることである。この前提としては、先述したように桓武天皇の生母である和史（和朝臣）新笠の出自が、「倭君」の伝承を介して、「和氏譜」により武寧王の後裔を称するようになり、「朕の外戚」として百済と日本の王族系譜を一体化する要求が背景にあったと考えられる。

## おわりに

以上、百済三書に関係した研究史整理と基礎的考察をおこなってきた。論点は多岐に渉るが、当該史料が有した古い要素と新しい要素の併存については、『日本書紀』編纂史料として八世紀初頭段階に「百済本位の書き方」をした原史料を用いて、「日本に対する迎合的態度」により編纂した百済系氏族の立場とのせめぎ合いとして解釈した。『日本書紀』編者は「百済記」を用いて、干支年代の移動による改変をおこない起源伝承を構想したが、「貴国」（百済記）・「（大）倭」（百済新撰）・「日本」（百済本記）という国号表記の不統一に典型的であらわれているように、基本的に分注として引用された原文への潤色は少なかったと考えられる。その性格は、三書ともに基本的に王代と干支が記載された特殊史で、断絶した王系ごとに百済遺民の出自や奉仕の根源を語るもので、「百済記」は、「百済本記」が描く6世紀の聖明王代の理想を、過去の肖古王代に投影し、「北敵」たる高

句麗を意識しつつ、日本に対して百済が主張する歴史的根拠を意識して撰述されたものであった。亡命百済王氏の祖王の時代を記述した「百済本記」がまず成立し、百済と倭国の通交および、「任那」支配の歴史的正当性を描く目的から「百済記」が、さらに「百済新撰」は、系譜的に問題のあった⑦毗有王～⑪武寧王の時代を語ることにより、傍系王族の後裔を称する多くの百済貴族たちの共通認識をまとめたものと位置付けられる。三書は順次編纂されたが、共通の目的により組織的に編纂されたのであり、表記上の相違も『日本書紀』との対応関係に立って、記載年代の外交関係を意識した用語により記載された。とりわけ「貴国」は、冊封関係でも、まったく対等な関係でもない「第三の傾斜的關係」として百済と倭国の関係を位置づける用語として用いられている。

なお前稿<sup>(64)</sup>では、「任那日本府」について、反百済的活動をしていた諸集団を一括した呼称であることを指摘し、『日本書紀』編者の意識とは異なる百済系史料の自己主張が含まれていることを論じたが、おそらく「百済本位の書き方」をした「百済本記」の原史料に由来する主張が「日本府」の認識に反映したものと考えられる。「任那」支配については、倭国が支配する「蕃国官家」(継体二十三年三月是月条)から、百済の「蕃」となった「的臣敬受天勅来撫臣蕃」(欽明十四年八月条)への転換は、百済による侵攻を前提にした「中間以任那国属賜百済」(大化元年七月丙子条)の認識によると考えられる。

## 註

(1)——三品彰英「百済記・百済新撰・百済本記」(『日本書紀朝鮮関係記事考証』上、天山社、2002年、初出1962年)、117～121頁。分類名称は井上秀雄「任那日本府の行政組織」(『任那日本府と倭』東出版、1973年、初出1966年)、31頁による。

(2)——拙稿「『日本書紀』の「任那」観—官家・日本府・調—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』179集、2013年)。

(3)——津田左右吉「百済に関する日本書紀の記載」(『津田左右吉全集』2、岩波書店、1963年、初出1924年)。

(4)——百済系史料から出た「旱岐」と、日本側の表記「干岐」の違いにも注目する。

(5)——津田左右吉註(3)前掲書、214頁。

(6)——同前、225頁。

(7)——今西竜「百済史講話」(『百済史研究』国書刊行会、1970年、初出1930年)、79～80頁。

(8)——三品彰英「百済王の系図」(註(1)前掲書)、103～109頁。すでに、池内宏『日本上代史の一研究』(中公美術出版、1970年、初出1947年)、19頁には、「百済本記の二王の名に、おのおの「近」字を冠してあるのは、二王の以前にあったという同名の王と区別したものであるが、それは後世にいたって百済の王家の系図のことさら延長せられたことを意味するもので、書紀に背(背)古王といい、貴須王とあって、ともに近字のないのが正

しいのである」と述べている。

(9)——榎英一「推古朝の「国記」について」(『日本史論叢』5、1975年)、関根淳「天皇記・国記」(『日本史研究』605、2013年)。

(10)——笠井倭人「日本文献にみえる初期百済史料」(『古代の日朝関係と日本書紀』、吉川弘文館、2000年、初出1981年)、古川政司「百済王統譜の一考察」(『日本史論叢』7、1977年)。

(11)——非原注説を採用する岩橋小弥太「日本書紀に見える朝鮮史籍」(『上代史籍の研究』上、1955年、初出1954年)においても、百済の役後の亡命百済人の手になるとの見解を述べる。

(12)——池内宏註(8)前掲書。

(13)——同前、37頁。なお、末松保和『任那興亡史』(吉川弘文館、1949年)は、さらに「己巳年の史実」として倭国による加耶七国平定を重視した。

(14)——同前、43頁。

(15)——丁仲煥(泊勝美訳)「『日本書紀』に引用された百済三書について」(『古代日本と朝鮮の基本問題』学生社、1974年、76頁)は、「どこまでも百済と卓淳との関係・交渉とみるべきであり、日本と百済との交渉とはみることができないのである」とのべ、田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」』(吉川弘文館、1992年)も、「百済記」

の記載内容と史実とを区別し、「百済記」には干支により364年から369年に至る簡単な百済と倭国の通交開始記事が記されていたが、干支にも造作があり、倭による出兵や加羅七国平定記事など倭国による「任那」支配の起源を否定し、甲子年に百済の使者が卓淳国に来たこと、369年に百済王から七枝刀が贈られたことに史実の核を認める。

(16)——池内宏註(8)前掲書、36頁。

(17)——同前、45頁。

(18)——坂本太郎「継体紀の史料批判」(『坂本太郎著作集』2、古事記と日本書紀、吉川弘文館、1988年、初出1961年)、木下礼仁「『日本書紀』にみえる「百済史料」の資料的価値について」(『日本書紀と古代朝鮮』塙書房、1993年、初出1961年)。

(19)——同『六国史』(吉川弘文館、1970年)、75～76頁においても同様な見解を主張される。

(20)——木下礼仁「『百済史料』についての一整理」(『日本書紀と古代朝鮮』塙書房、1993年、初出1961年)、同「日本書紀素材論への一つの試み」(同前、初出1964年)においても、同様な国語学的分析がなされている。

(21)——三品彰英註(1)前掲論文、134頁。

(22)——山尾幸久「任那日本府と倭について」(『史林』56-6、1973年)、146頁。

(23)——三品彰英註(1)前掲論文、同「百済・百済新撰・百済本記について」(『朝鮮学報』24、1962年)、同「『百済本記』の撰述年代について」(『朝鮮学報』36、1965年)。

(24)——三品彰英註(8)前掲論文、105～109頁、同「日本書紀所載の百済王暦」(『日本書紀研究』1、塙書房、1964年)。

(25)——「中国文献の内で日本という国号は『唐書』あたりから見えはじめるが、百済史籍がこの称号を使用したのは書紀所引の『百済本記』が初見である」(三品彰英註(1)前掲論文、122頁)として、原書における使用を想定する。しかしながら、熊谷公男『大王から天皇へ』日本の歴史03(講談社、2001年)、吉田孝『日本誕生』(岩波新書、1997年)、神野志隆光『「日本」とは何か』(講談社、2005年)などによれば、「日本」号の定着は「天皇」号とセットで、淨御原令あるいは大宝令段階以降とするのが現在の通説的見解である。

(26)——笠井倭人「『三国遺事』百済王暦と『日本書紀』」(『古代の日朝関係と日本書紀』吉川弘文館、2000年、初出1962年)、三品彰英「継体紀の諸問題」(『日本書紀研究』2、塙書房、1966年)。

(27)——川口勝康「紀年論と「辛亥の変」について」(『日

本古代の社会と経済』上、吉川弘文館、1978年)、山尾幸久註(22)前掲論文、144～145頁、同『筑紫君磐井の戦争』(新日本出版社、1999年)、177～202頁。なお、新羅の金官国侵攻についても段階的であり、『日本書紀』継体二三年四月是月条と『三国史記』新羅本紀法興王十九年条を、3年ずれた重出記事と見る必要がないことについては木村誠「新羅上大等の成立過程」(『古代東アジア史論集』上、吉川弘文館、1978年)、155頁、田中俊明註(15)前掲書、223～229頁参照。

(28)——井上秀雄註(1)前掲論文、同「古代日本のいわゆる南朝鮮経営」(同前、初出1969年)、同「百済三書の史料的价值」(『ゼミナール日本古代史』下、光文社、1980年)。

(29)——そのように考えるならば、井上説のように王暦と三書が独立的であったと想定しなくとも、「百済本記」と「百済記」が同じ王暦により編纂されたことの説明は難しくない。鈴木靖民「いわゆる任那日本府および倭問題」(『歴史学研究』405、1974年)にも、亡命百済人説からの批判がある。

(30)——丁仲煥註(15)前掲論文。

(31)——福田良輔「書紀に見えている「之」字について」(『古代語文ノート』南雲堂楓風社、1964年、初出1934年)、白藤礼幸「日本書紀の文末助字について」(『上代文学論叢』楓風社、1968年)、森博達『日本書紀の謎を解く』(中央公論新社、1999年)、同「日本書紀の研究方法及今後課題」(『東アジアの古代文化』106、2001年)などによれば、文末助字「之」は、朝鮮の俗漢文や日本の和化漢文にしばしばみられ、正格漢文にはほとんど見られないことが注目され、『日本書紀』でも「百済本記」などの引用史料に見える以外は、中国人が述作した部分にはないことが指摘されている。さらに、「百済記云、壬午年、新羅不<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>貴国<sub>一</sub>。貴国遣<sub>二</sub>沙至比跪<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>討<sub>二</sub>之<sub>一</sub>」などとあるように、「百済本記」よりも「百済記」において文末助字「之」の用例が明瞭であること、正格漢文では用いない「所」字の誤用が「百済新撰」にあることを考慮すれば、百済三書は全体として百済からの渡来人により編纂され、『日本書紀』は百済三書の原表記を全体として尊重した可能性を指摘できる。

(32)——久保田喜一「『百済本記』考」(『日本歴史』309、1974年)。

(33)——山尾幸久註(22)前掲論文、同「百済三書と日本書紀」(『朝鮮史研究会論文集』15、1978年)、同「百済三書の成立と性質」(『古代王権形成史論』岩波書店、1983年)、同「『日本書紀』と百済系史料」(『立命館文学』

500, 1987 年), 同『古代の日朝関係』(塙書房, 1993 年), 註(27)前掲書。

(34)——加藤謙吉『『日本書紀』とその原資料』(『日本史研究』498, 2004 年)。なお, 古川政司註(10)前掲論文, 50 頁も「百済新撰」の成立を 8 世紀初頭とする。

(35)——笠井倭人註(10)前掲論文, 角林文雄「百済三書の性格」(『日本古代の政治と経済』吉川弘文館, 1989 年)。

(36)——角林文雄註(35)前掲論文, 310 頁。

(37)——遠藤慶太「古代国家と史書の成立」(『日本史研究』571, 2010 年)。

(38)——伝承的な百済王を除き, 確実な肖古王(『三国史記』の近肖古王)を初代として代数を記載した。

(39)——三品彰英註(1)前掲書, 126 頁, 山尾幸久『古代王権形成史論』(註(33)前掲書), 200~213 頁。

(40)——池内宏註(8)前掲書, 123~124 頁, 平野邦雄「ヤマト王権と朝鮮」(『岩波講座日本歴史』1, 原始および古代 1, 岩波書店, 1975 年), 233~234 頁, 山尾幸久『『日本書紀』と百済系史料』(註(33)前掲論文), 335 頁, などの指摘によれば, 同一事実の蓋然性が高い。ただし, 「百済新撰」は本文が完成した後に引用されており, 本文は武寧王や昆支を祖とする氏族伝承を基礎とした別系統の史料に依拠していると考えられる。

(41)——山尾註(39)前掲書, 206 頁。

(42)——三品彰英註(1)前掲書, 128 頁, 古川政司註(10)前掲論文, 49 頁。

(43)——「百済本記」を原史料にしたと推定される『日本書紀』欽明二年四月条, 同七月条, 同五年十一月条には, 肖古王代における百済と加耶諸国との通交開始が語られている。

(44)——『古事記』応神段には「百済国主照古王」が「横刀及大鏡」を貢上したとあり, 石上神宮には七支刀が現存し, 「泰和四(369)年」の年紀がある。

(45)——『三国史記』百済本記蓋鹵王二十一(475)年条に本満致の南行記事がある。

(46)——実際の血縁は, 蓋鹵王と武寧王の間で途切れていたが, 『三国史記』百済本紀や『日本書紀』雄略紀五年四月・五月・六月条のように, 武寧王は蓋鹵王の血統を直接引いているとの主張もなされるようになった。古川政司註(10)前掲論文によれば, 雄略紀二十一年条の分注に「汶洲王, 蓋鹵王母弟也」とあるのは「百済新撰」の記載であり, 第 2 章【神功紀と百済記の関係】において先述したように雄略紀二年七月条所引の「百済新撰」05 において毗有王を蓋鹵王に改めていることを前提と

するならば, ここも「汶洲王, 毗有王母弟也」が原文であったとし, 『南齊書』百済伝にみえる祖父牟都(文周王)から孫牟大(東城王)への継承を想定する。なお, 久爾辛王と三斤王の在位は「百済新撰」では確認されないで, 歴代から省いた。

(47)——山尾註(39)前掲書, 205~206 頁。

(48)——田中俊明註(15)前掲書, 202 頁によれば, 『日本書紀』が 372 年に七支刀がもたらされたことも潤色で, 本来は 369 年の製作と同時にもたらされたと推定する。

(49)——今西竜註(7)前掲論文, 80 頁。

(50)——三品彰英註(8)前掲論文, 108~109 頁。

(51)——三品彰英註(8)前掲論文, 106 頁, 山尾幸久「百済三書と日本書紀」(註(33)前掲論文), 22~23 頁。山尾氏は, 左京諸蕃下にみえる百済公の祖「汶洲王」を「都慕王廿四世孫」とあることから義慈王の世代に解した。しかし, 直前に記載された 28 代恵王は「都慕王卅世孫」とあり, 『続日本紀』延暦九年七月辛巳条には 14 代「貴須王」は「第十六世の王」ともあり, 代よりも世が 2 つ多い数え方を前提とすれば, 恵王より前, 貴須王より後の世代に比定でき, 「都慕王廿四世孫」たる「汶洲王」は, 22 代文周(汶洲)王の可能性が高い。ただし, 管野朝臣条には同じ「貴首王」を「都慕王十世孫」とも数え, 和朝臣条には 25 代武寧王を「都慕王十八世孫」とする『三国史記』の世代と同じ系譜も語られており, 新旧の系譜が併存していたと考えられる。

(52)——平野邦雄「今来漢人」(『大化前代社会組織の研究』吉川弘文館, 1969 年)。

(53)——『日本後紀』延暦十八年二月乙未条の和気清麻呂薨伝によれば, 中宮大夫在任中(延暦 7 年 2 月から延暦 8 年末の間)の編纂と考えられる。

(54)——田中史生「桓武朝の百済王氏」(『日本古代国家の民族支配と渡来人』校倉書房, 1997 年)。

(55)——古川政司註(10)前掲論文, 50~51 頁。

(56)——古川政司註(10)前掲論文, 53 頁。

(57)——ただし, 倭国の助力により東城王の即位を記した『日本書紀』雄略二十三年四月条は, 「百済新撰」に依拠している可能性が高い。

(58)——栗原朋信『『書紀』神功・応神紀の「貴国」の解釈からみた日本と百済の関係』(『上代日本対外関係史の研究』吉川弘文館, 1978 年, 初出 1978 年)。

(59)——同前, 273~276 頁。

(60)——拙稿「古代日本の世界観」(『国立歴史民俗博物館研究報告』119, 2004 年)。

(61)——ただし, 「日本」号の使用開始が浄御原令段階



とすれば、「百済本記」の成立は7世紀末と考えることも可能であるが、同時代の確実な史料がなく、唐の承認や大宝令の施行による帝国意識の確立を重視したい。

(62)——加藤謙吉『『日本書紀』と渡来人』(大山誠一編『聖徳太子の真実』平凡社, 2003年), 同注(34)前掲論文。なお、加藤氏は、吉田一彦「僧旻の名について」(藺田香融編『日本仏教の史的展開』塙書房, 1999年)における、「釈道顕」のような「釈某」という表記は、8世紀初頭

頃から用いられた、中国風の最新の法名表記であるとの指摘から、8世紀の編纂を推測する。同じく対外関係記録である「伊吉連博徳書」にも「日本」号が用いられていることは偶然ではなく、編者の潤色というよりも8世紀初頭の国家意識を反映したものと考えられる。

(63)——笈敏生「百済王姓の成立と日本古代帝国」(『古代王権と律令国家』校倉書房, 2002年, 初出1989年)。

(64)——拙稿前掲註(2)論文。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2014年1月7日受付, 2014年5月26日審査終了)

## Baekje Three Manuals as “Chronicles of Japan” Compilation Historical Materials

NITO Atsushi

This article reviews and briefly examines the history of research on the three books of Baekje: *Kudara Honki* (*Original Records of Baekje*), *Kudara Ki* (*Records of Baekje*), and *Kudara Shinsen* (*the New Selection of Baekje*). Taking various arguments into consideration, this article indicates that the three books consisted of old and new elements because they were born out of a dilemma; they were based on the original books written from the self-centered viewpoint of Baekje but edited by Baekje exiles as historical materials for the compilation of *Nihon Shoki* (*the Chronicles of Japan*) in a favorable manner for Japan in the beginning of the eighth century. The editors of *Nihon Shoki* altered the times of events by modifying the Chinese zodiac calendar when using *Kudara Ki* to write a legend of the origin of Japan; however, as typically represented by inconsistency of the name of Japan, such as called “Kikoku” in *Kudara Ki*, “(Oh-)yamato” in *Kudara Shinsen*, and “Nihon” in *Kudara Honki*, it is considered that in principle, the quotations in the notes of *Nihon Shoki* from the three books were hardly embellished. All of the three books were history books dated with imperial era names and the Chinese zodiac calendar system and were aimed to delineate the background of the family and profession of each Baekje clan surviving after the fall of their dynasty. In *Kudara Ki*, the ideal of King Song Myong period, in the sixth century, described by *Kudara Honki* was mirrored in the King Chogo period, and historical legitimacy was explained to Japan from the viewpoint of Baekje with an eye on its northern enemy, Goguryeo. At first, *Kudara Honki* was written to describe the history of the dynastic ancestors of the Kudara-no-Konikishi clan exiled from Baekje. Then, *Kudara Ki* was created for the purpose of providing historical legitimacy to the domination of Mimana, as well as depicting exchanges between Baekje and Wakoku (Japan). Last, *Kudara Shinsen* was compiled to summarize the common perspective of numerous Baekje clans who claimed the collateral descent of the Baekje Dynasty by detailing the eras from ⑦ King Biyu to ⑪ King Muryeong, whose lineage had not been clear. Though the three books were edited one by one, they were systematically compiled for the same purpose. Inconsistencies in expression among the three books were corrected from the viewpoint of compatibility with *Nihon Shoki* by using terms to describe the diplomatic relationships at the times of events more clearly. In particular, the word “Kikoku” was used to describe the relationship between Baekje and Wakoku not as a tributary or completely equal relationship but as the “third slanted

---

relationship.”

Our former article indicated that a variety of groups fighting against Baekje were collectively called as the “Japanese Mimana Government” and argued that *Nihon Shoki* had incorporated the perspective of Baekje that was inconsistent with that of the editors of the chronicle. This is considered because the perspective regarding the Japanese Mimana Government was affected by the insistence derived from the original materials of *Kudara Honki*, which was compiled from the self-centered viewpoint of Baekje.

Key words: *Nihon Shoki* (*the Chronicles of Japan*), Three books of Baekje, Kikoku, Nihon, Slanted relationships